

「経済志林」第65巻第4号
平成10年3月発行 別刷

【論文】

トルコへの国際ツーリズムの発達と
アンタリヤのペンション群

寺阪昭信・松村嘉久・山本健兒

トルコへの国際ツーリズムの発達と アンタリヤのペンション群

寺阪昭信・松村嘉久・山本健兒

目 次

- I. はじめに
- II. アンタリヤの観光客向け宿泊施設の概況
- III. アンタリヤの観光開発とペンション経営
 - 1. F氏の略歴
 - 2. 帰国の意思決定
 - 3. ペンション経営の隆盛
 - 4. ペンション経営とインフラ・公共サービス
 - 5. ペンション経営の転換期
- IV. アンタリヤ旧市街地のペンション群
 - 1. 相対的に経営が安定しているペンション
 - 2. 不安定なペンション経営
 - 3. 小 括
- V. おわりに
- 注
- 文献
- 写真

I. はじめに

国際ツーリズムであれ国内ツーリズムであれ、ツーリズム⁽¹⁾の発達とこれに対応する地域開発や都市開発のためには、欠くことのできない主体と施設がある。まずなによりも、旅行をする主体＝観光客が旅行の必要

性や積極的意義を認知し、実際に旅行をする時間的かつ金銭的余裕を持つ必要がある。第2に、ツーリストにとって魅力となるツーリズム対象がなければならない。ツーリズム対象は観光資源と呼ばれることが多いが、自然の恵みだけでなく、人間の工作物や活動もまたツーリズムの対象となる。第3に、日帰りツーリズムを除けば、ツーリストを受け入れる場所に宿泊施設が開発されなければならない。第4に、ツーリストの居住地と目的地を結ぶ交通機関や関連するインフラが整備されなければならない。目的地が比較的広域にわたる場合には、目的地域内での交通インフラの整備や交通機関の充実が図られなければならない。第5に、ツーリスト、ツーリズム対象、宿泊施設、交通機関を結び付けるコーディネータ、すなわちツーリズム商品というサービスを生産するツアーオペレータという主体が必要である。第6に、オペレータとツーリストの間に立って、いわばサービスの小売り機能を果たす各種の旅行エージェンシーが必要である。最後に、これらの6つの要素のいずれに対しても、規制や推進政策を通じて影響を与える政府・地方自治体という主体も考慮に入れなければならない。

本稿は、ツーリズムに直接関わる上の7つの要素（ツーリスト、宿泊施設、ツーリズム対象、交通インフラ・機関、ツアーオペレータ、各種の旅行エージェンシー、政府・地方自治体）のうち宿泊施設に焦点を当てて、国際ツーリズムにおいて特に目覚ましい発展を遂げたトルコ⁽²⁾のアンタリヤの実態を描くことを目的とする。国際ツーリズムのための宿泊施設とえば、デラックスな大型ホテルをまず取り上げるのが普通であろう。しかし、国際ツーリズムの発達とともに、現実には大型ホテルだけでなく、その対極に位置する簡易な宿泊施設、すなわちペンションも群生することがおおうにしているという現実と、ペンション経営に焦点を当てることによって国際ツーリズムが持ついわば影の側面を照射できるであろうという理由から、ここではペンションを取り上げることにする。

本論に入る前に、手短かに研究対象地を素描しておく。アンタリヤ県はトルコの南部、地中海に面している。もともと農業生産の豊かな地域である。

その県庁所在都市であるアンタリヤ市の人口は1990年において約378千人を数えた(1990 Genel Nüfus Sayımı İdari Bölünüş)。トルコではイスタンブール、アンカラ、イズミルの3つの百万都市について、アダナ、ブルサなどいくつかの人口50万人を上回る大都市があり、アンタリヤ市の人口規模順位は第12位であった。しかし、1970年のアンタリヤ市の人口は10万人にも満たず、順位も21位でしかなかった。この20年間で4倍近い人口増加を記録したのである。これほどの成長を遂げた大都市は、トルコでは他にない。県スケールでも、アンタリヤの人口は急増した。1970年の人口は約577千人、1990年には約1132千人と、ほぼ倍増したが、これはイスタンブール県につぐ第2に高い増加率だった。その最大の理由は、観光開発にある³³⁾。トルコへの国際ツーリズムの発展にとって、イスタンブールやエーゲ海地域とともに、アンタリヤ県は重要な地域となっている。国内からの観光客も多いが、特に夏季のヨーロッパからのバカンス客の受け入れという点で、アンタリヤ県は最大のセンターとなっている³⁴⁾。

アンタリヤ県の観光資源は、快晴が続く暑い夏、砂浜・砂利浜・切り立つ岩浜などが交互に連なる長い海岸線、海岸近くにまでせまる標高3000m前後の山々からなるベイ山脈やトロス山脈、古代ギリシア・ローマ時代の遺跡を初めとする各種の歴史的遺産、そしてヨーロッパからの観光客にとってエキゾチックな雰囲気醸し出すイスラーム関連の施設や風俗である。トルコがアタテュルクによる共和国建設以来、西欧化をめざしてきたことによってヨーロッパ的な開放的側面をあわせもっていることも、他のイスラーム諸国にはない、ヨーロッパ人にとってのトルコの魅力になっていると考えられる(図1)。

アンタリヤ県内では、東のアランヤからシデ、県都アンタリヤを経て、南西のケメル、フィニケ、カシュにいたる大小の都市を拠点として、国際ツーリズムのための宿泊施設が多数存在している。交通面ではアンタリヤ市郊外にある国際空港が最も重要な役割を果たすが、フェリーやヨットによる到着もアンタリヤを初めとしていくつかの港で可能である。

リズムと深く関わっていることも事実である。その実態については後述するが、そうしたペンションの群生が、県内最大の都市アンタリヤではひときわ顕著である。県内のペンションの約3分の1は、アンタリヤ市に立地しているのである。

この点を、表1で確認しておこう。これは、トルコ政府の観光省が設定した基準で、宿泊施設を種類別と都市圏別にまとめたものである。アンタリヤ、ケメル、アランヤ（ベルディビ、テキロヴァを含む）、シデ（マナヴガットを含む）という県内4大ツーリズム地域のほかに、アンタリヤ市の東部のベレク、同じく南西部のカシュ、カルカン、バタラといった小規模なツーリズム地域もある。アンタリヤ市については、その旧市街地カレイチを特に取り出して整理してみた。

この表から次のことが言える。ホテル・ペンション数でみるとアンタリヤ市はアランヤにつぐ規模を誇るが、部屋数やベッド数でみると、ケメルやシデに遠く及ばないことがわかる。比較的新しく開発されたケメルでは、ホリデービレッジ（休暇村）と呼ばれる大規模なホテルが20存在し、そのためベッド数も多くなっている。5スターのホテルは少ないが、4スターのホテルが多い。しかし実は、そうした大規模宿泊施設の多くが、ケメル市街からやや遠隔地に立地しているのに対して、市街ではペンションが多い。アランヤでは3スターの中級ホテルが非常に多いという点に特徴がある。また、2スターや1スターの低級ホテルの数も多い。しかし、ペンションはさほど多くない。シデには、高級ホテルが多く、ホリデービレッジも少なくない。シデとアンタリヤ市の中間にあるベレクの大規模開発は、ケメルと比べてもより新しく、高級ホテルとホリデービレッジしかない。これらに対して、アンタリヤ市から最も遠隔地にある県内南西部のカシュ、カルカン、遺跡のある村バタラには、高級ホテルやホリデービレッジが1つもなく、ペンションの方がホテルよりも多い。

これらと比べたアンタリヤ市の特徴は、この地域で最も早くから宿泊施設が整備され、5スターのホテルが集積したこと、またその対極にあるベ

表1 アンタリヤ県の地域別に見たホテル・ペンション

	カレイチ			アンタリヤ市(カレイチを除く)			ケメル		
	数	部屋数	ベッド数	数	部屋数	ベッド数	数	部屋数	ベッド数
5星ホテル	0	0	0	7	1,957	4,076	1	145	300
4星ホテル	0	0	0	7	709	1,491	10	1,675	3,509
3星ホテル	0	0	0	29	1,486	3,057	18	1,825	3,819
2星ホテル	0	0	0	21	797	1,621	18	656	1,305
1星ホテル	0	0	0	4	104	222	7	241	490
特別認可ホテル	7	191	389	0	0	0	2	100	237
特別認可ペンション	9	106	197	0	0	0	0	0	0
観光省認可ペンション	3	45	79	22	378	742	74	1,076	2,156
市が認可したホテル	3	24	46	34	804	1,653	21	564	1,195
市が認可したペンション	75	654	1,422	121	1,523	2,574	113	1,274	2,771
休暇村	0	0	0	0	0	0	20	6,348	13,546
アパートホテル	0	0	0	0	0	0	9	121	347
合計	97	1,020	2,133	245	7,758	15,436	293	14,025	29,675

	アランヤ			シデ			ベレク	カシュ		
	数	部屋数	ベッド数	数	部屋数	ベッド数	数	数	部屋数	ベッド数
5星ホテル	4	894	1,855	11	2,861	5,922	5	0	0	0
4星ホテル	27	4,401	9,333	21	4,738	9,884	3	0	0	0
3星ホテル	93	8,081	16,229	24	3,256	6,999	0	2	164	320
2星ホテル	54	2,830	5,637	5	363	734	0	3	78	160
1星ホテル	22	702	1,417	2	82	164	0	1	20	46
特別認可ホテル	1	23	46	0	0	0	0	0	0	0
特別認可ペンション	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
観光省認可ペンション	0	0	0	6	111	247	0	11	174	339
市が認可したホテル	68	1,964	4,196	80	1,985	4,798	0	45	809	1,655
市が認可したペンション	71	1,004	2,138	60	633	1,361	0	64	665	1,372
休暇村	4	1,296	3,393	15	6,106	13,010	5	0	0	0
アパートホテル	113	2,803	10,583	11	141	437	0	0	0	0
合計	457	23,998	54,583	235	20,279	43,583	13	126	1,910	3,892

	カルカン			バタラ			合計		
	数	部屋数	ベッド数	数	部屋数	ベッド数	数	部屋数	ベッド数
5星ホテル	0	0	0	0	0	0	28	5,860	12,153
4星ホテル	0	0	0	0	0	0	68	11,523	24,217
3星ホテル	7	372	768	1	136	272	174	15,320	31,464
2星ホテル	4	165	330	0	0	0	105	4,889	9,787
1星ホテル	4	81	160	0	0	0	40	1,230	2,499
特別認可ホテル	0	0	0	0	0	0	10	314	672
特別認可ペンション	0	0	0	0	0	0	9	106	197
観光省認可ペンション	12	178	358	0	0	0	128	1,962	3,948
市が認可したホテル	5	136	277	20	454	908	276	6,740	4,728
市が認可したペンション	39	336	719	24	268	541	567	6,630	2,898
休暇村	0	0	0	0	0	0	44	13,750	29,949
アパートホテル	0	0	0	0	0	0	133	3,065	11,123
合計	71	1,268	2,612	45	858	1,721	1,582	71,389	153,635

注：市が認可したホテル・ペンション以外は、観光省が認可した宿泊施設である。

ベレクについては、施設数のデータしか得られなかった。

資料：Antalya İl Turizm Müdürlüğü'nce Hazırlanmıştır (1996); 1996 Antalya Turizm Envanteri, Grup Tanıtım & Danışmanlık, Antalyaに基づいて寺阪が作成。

ンションが集積しているというところにある。また、ビジネスホテルも集積している。ビジネスホテルは、表では3スターや2スターのホテルの中に含まれている。ペンションは、アンタリヤ県の宿泊施設数の半数弱(45%)を占めるが、ベッド数では約1割(11%)にしか過ぎない。それ故、当然のことではあるが、ペンションはツーリズム宿泊施設産業の中の零細企業として位置づけられる。アンタリヤ市は、この産業の大企業たる5スターホテルと零細企業たるペンションとが、県内の他の都市圏よりも目立つという意味で、宿泊施設産業の分極化が著しい都市である、と言える。そして、この分極化は、アンタリヤ市の空間構成における分極化と対応している点が注目される。すなわち、5スターや4スターの高級ホテルは旧市街地カレイチには全くなく、すべて新市街地に、特に周辺部にあるのに対して、カレイチには零細なペンションが集積しているのである(図2)。

カレイチに大型高級ホテルがないのは、市街地における建築規制の故である。ユネスコの世界遺産に登録されるほどではないが、この旧市街地は

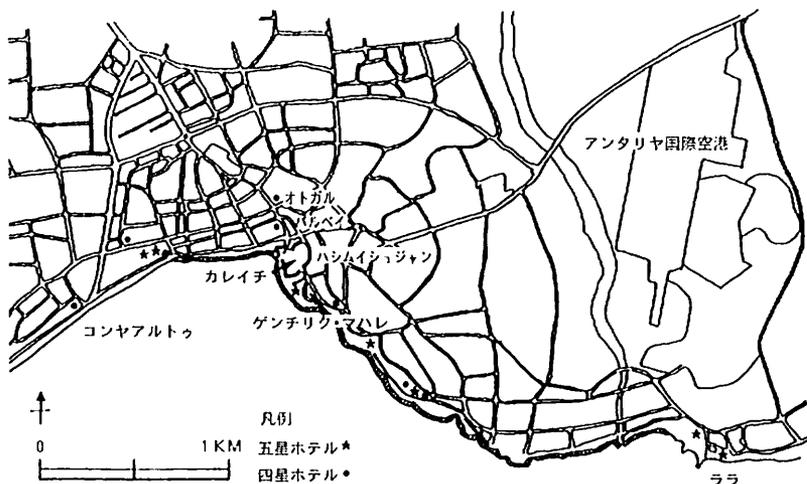


図2 アンタリヤ市の概略図と高級ホテルの分布(松村作成)

町並み保存地区として指定されている。もともと小規模な民家もたくさんあったところなので、土地や建物の権利関係も入り組んでいるものと考えられる。そのため、大型高級ホテルの新規開発には不向きな土地であった。しかし、カレイチは旧市街地であるだけに、オスマン様式の伝統的な低層建物が多数残っている。その多くは老朽化しているが、修復すれば重要な観光資源となりうる可能性を持っている。実際、町並み保存地区指定は、アンタリヤ市の国際ツーリズム開発の一環という意味を持っている。老朽化したオスマン様式の建物を修復すれば、その投資にみあう経済的利用を図らなければならない。個々の建物だけでなく、旧市街地全体として伝統的な建物を修復すれば、それが面的な広がりを持ち、観光客を引き付ける重要な観光資源となりうる。その修復された建物を宿泊施設やレストラン、土産物店として利用すれば、修復のための投資を回収できる。実際、カレイチには、オスマン様式の建物を修復したスペシャルライセンスホテルが、少数ではあるが設立されている。

上記のような思惑から、カレイチでは徐々にオスマン様式の建物が修復され、またペンションも増えてきた。典型的なインナーシティの状態になりつつあったカレイチは、ツーリズム開発とともに国際観光客と国内観光客の双方にとって、アンタリヤ市におけるツーリズムの核として成長してきた。1980年代半ば以降のことである。カレイチのペンション群は、基本的にはオスマン様式の建物であり、新市街地や東の郊外のララ海岸にひろがるペンション群が、近代建築様式であるのとは対照的である(写真1, 2参照)。

オスマン様式の特徴を備えた建物は2階建てが一般的である。2階部分には、チンバー(バットレス)に支えられて、街路の上に張り出すようにしてバルコニー(アルコーブ)が作られている。これによって居住空間を広げ、採光と風通し、家屋から外への見晴らしを良くする。しかし、このバルコニーのために、もともと狭い街路が一段と狭くなり、中世的な街路景観が作り出される。アンタリヤの夏は非常に暑いので、窓が小さく、木

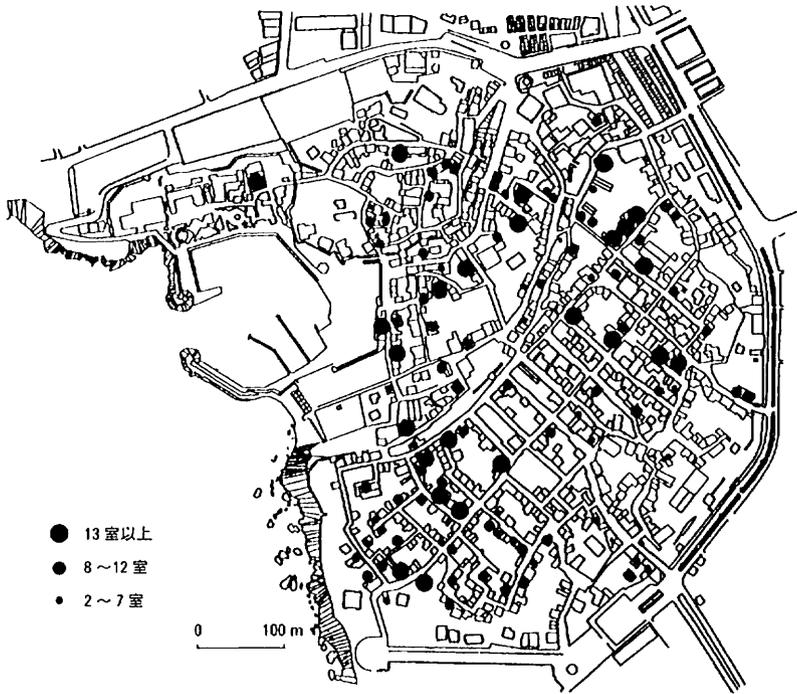


図3 カレイチにおけるペンションの分布

資料：Antalya İl Turizm Müdürlüğü'nce Hazırlanmıştır (1996): *1996 Antalya Turizm Envanteri*, Grup Tanıtım & Danışmanlık, Antalya と、現地調査に基づいて寺阪が作成。

製のブラインドがつけられている。建物正面の装飾は、同じオスマン様式の建物でも、他の地域のそれと比べて少ない。家屋の構造は木骨（造）軸組と、土、煉瓦、石などを素材として充填した漆喰壁が一般的であるが、石造りの建物もある。赤い瓦屋根という色彩に、地中海地域の建物の特徴が見出される。このような伝統的オスマン様式の建物が連続することによって、トルコの伝統的な都市景観が構成され、訪れる観光客にとってエキゾチシズムが醸し出される（写真3～6参照）。

アンタリヤにはカレイチ以外に、町並み保存地区として指定されている地区が2つある。1つは、カレイチ北東のアンタリヤ市中心部に接するバ

ルベイであり、もう1つはカレイチ東部にアタテュルク通りを挟んで隣接するハシムイシュジャンである。前者は1990年に、後者は1993年に指定を受けた。しかし、この2つの地区は、主として住宅街区となっており、景観保全の対照となる老朽建物の密度はカレイチよりも低い。そのため、観光資源としての価値は小さい。実際、この2地区にあるペンションの数は少ない。

アンタリヤ市の中では、カレイチにペンションが集中している。0.3 km²の面積に100近くのペンションが立地している。カレイチ内部で見ると、ファレーズと呼ばれる海岸の岩石段丘の海寄りと、カレイチの北側にあたるアンタリヤ市の中心街に近い所にペンションは集中している。とはいえ、カレイチ内ではいたるところにペンションがあるといってもよいほどに、ほとんどの通りに面して立地している。その中では、海よりの位置にあるペンションに比較的高級なものが多い(図3)。

標準的なペンションは、ツインルームからなる2階建てか3階建てである。アンタリヤ県の平均規模は11.7部屋、22.7ベッド数であるが、カレイチのそれは8.7部屋、19.0ベッド数とやや小さい。これはオスマン様式の建物を利用するために、小規模にならざるをえないからである。ただし、すべてのペンションがオスマン様式の建物を利用して経営されている訳ではない。建物の様式からすれば、カレイチに立地する宿泊施設は大きく3つの形態に分けることができる。第1は、上に説明したオスマン様式のものである。これはスペシャルライセンスを観光省から得て、ホテルとして経営されているものが多いが、その平均規模は22.6の部屋数と50.6のベッド数であり、1スター級のホテルよりも小さ目である。しかし、なかには48部屋、100ベッド数といったかなり大規模なものもある。スペシャルライセンスを得ているホテルの宿泊料金は決して安くはない。第2は、外観をオスマン風に改装したもので、内部構造は近代的なものである。第3は比較的新しく建てられた在来の民家を改造したもので、非オスマン様式の建物である。

観光省から発行された1995年版の『アンタリヤ観光便覧』(Antalya Il Turizm Müdürlüğü'nce Hazırlanmıştır)に記載されているカレイチ地区のペンションのうち、観光ペンションのカテゴリーに含まれるものは12しかない。この合計の部屋数は190、ベッド数は365、平均15.8部屋に30ベッド数という規模である。ほかに便覧には、一般のペンションが60軒掲載されている。この合計は519部屋、1090ベッド数、平均8.7部屋、18.2ベッド数ということになり、観光ペンションよりもさらに小規模である。

ペンションの中にも格差があるが、いずれにせよ、1995年時点では70強しかなかったことになる。ところが1996年8月の現地調査によれば、カレイチには97の宿泊施設が立地している。95年から96年にかけてペンションが急増したわけではない。それゆえ、無認可のアウトサイダー的なペンションは決して少なくないことになる。この点はともかくとして、カレイチに立地する宿泊施設のうち、ドイツ人、フランス人、イギリス人ツーリストのための観光パンフレットに紹介されているのは1部のスペシャルライセンスホテルだけであり、その数は7軒しかない。しかし、カレイチ内でホテルの看板を掲げているのは10あった。スペシャルライセンスを得ていない3軒が、ホテルとしての認可を得て営業しているかどうかは未確認である。

英語、独語、仏語のガイドブック8冊⁶⁾を調べたところ、そのいずれかに紹介されているカレイチのペンションやホテルは、ここに立地する宿泊施設数の約半数49にのぼる。しかし、複数のガイドブックに掲載されているのは22に過ぎない。8冊のうち7冊に掲載されているのはわずかに1、4冊が2、3冊が8、2冊が11である。宿泊情報については、若者向きの安宿を中心にしたものから、格調の高いペンションに限るものや、段階を付して評価情報を掲載するものまで、ガイドブックの種類はさまざまである。アンタリヤの宿泊施設の紹介をカレイチにあるものに限っているガイドブックもある。このことは、カレイチのペンションが国際ツーリズムの

ポイントの1つになっていることを意味する。このようなガイドブックに記載されているペンションは、一定の評価を受けたものとみなしてさしつかえない。アンタリヤ市に立地するペンションのうち、かなりの数が国際ツーリズムに耐える施設と言えよう。

さて、上述のように、アンタリヤ市のペンションやこれに類する宿泊施設は、便覧によると現在カレイチに集積している。1996年時点で約230のペンションが市内にあるが、そのうち約3分の1の87がカレイチに立地している。しかし、この立地パターンは決して古いものではない。Rauh (1979) は、1977年から78年にかけて行った、アンタリヤ県とアンタリヤ市のツーリズムに関する詳細な調査記録である。これによると、当時、カレイチの内部には全く宿泊施設が存在していなかった。多くは、カレイチの北側にある市の中心部とオトガル（バスターミナル）とを結ぶ道路沿いや、その近辺に立地していた（Rauh, 1979, S. 33）。その多くはレジャー観光客向けの施設ではなく、アンタリヤ県最大の都市であるアンタリヤ市に商用で来た人のためのいわゆる商人宿的な宿泊施設であり、その設備はきわめて簡素なものであり、清潔さという点でも問題のあるものだった。

とはいえ、レジャー観光客向けの宿泊施設がなかったわけではない。1977年には、観光省からレジャー観光客向けの施設として認可を受けたものが10強あった。そのベッド数の合計は687だった。商人宿的施設も含めた宿泊施設数は55、ベッド数の合計は2441だったので（Rauh, 1979, S. 34）、アンタリヤ市のレジャー観光客向け宿泊施設の開発は、大きく遅れていたと言える。その10年後の1986年ですら、観光省の認可を受けたホテルやペンションのベッド数の合計は1200弱しかなかった（表2）。倍増したとはいえ、表1に示した90年代半ばのキャパシティと比べれば、雲泥の差がある。また、1986年当時、観光省によって認可されたペンションは7軒しかなかった。後述のように、1981年において観光省から認可されたペンションは6軒しかなかったのだから、1980年代

表2 1986年のアンタリヤ市におけるホテルとペンション

	数	部屋数	ベッド数
国が認可した5星ホテル	1	150	300
国が認可した3星ホテル	1	56	112
国が認可した2星ホテル	3	171	337
国が認可した1星ホテル	3	99	170
国が認可したモーテル	1	12	24
国が認可した特別ホテル	1	28	58
国が認可したペンション	7	99	194
小計	17	615	1,195
市が認可した3等級	13	231	500
市が認可した2等級	11	219	385
市が認可した1等級	10	237	512
市が認可した0等級	3	86	164
市が認可したペンション	27	189	526
小計	64	962	2,087
合計	81	1,577	3,282

資料：Antalya İl Turizm Müdürlüğü'nce Hazırlanmıştır (1986): *1986 Antalya Turizm Envanteri*, Grup Tanıtım & Danışmanlık, Antalya に基づいて寺阪が作成。

半ばすぎまで、アンタリヤ市内、とりわけカレイチには、ペンションはほとんどなかったと言える。

それゆえ、アンタリヤ市、とりわけその中のカレイチに立地するペンションの群生は、1980年代半ばすぎ以降の現象であると言える。ペンションがアンタリヤのツーリズム開発とともにどのように発展し、変貌してきたのか、また現在どのような経営状況にあるのか、幾人かのペンション経営者に対するヒヤリングの結果を、次章以降で提示する。

その前に、アンタリヤ市にある宿泊施設の中で、ホテルやペンションとは全く性格を異にするトルコ人観光客向けの宿泊施設がいくつかあることにも触れておきたい。これはいずれも公務員用の保養所である。多くはララ地区にある。

この地区を、後述するAペンションの経営者F氏の案内で見学したと

ころ、5スターのオフォホテルの手前のところに、まず車隊用の保養施設がある。オフォホテルはルーマニアの医者と契約して、療養長期滞在客も受け入れているホテルである。もっとも、F氏によれば、このあたりでは夜になると、いわゆる「ナターシャ」と呼称されるロシアから来た売春婦が立つとのことである。オフォホテルの近くの海岸際には、ホリデービレッジに類似した5スターのセラホテルがある。これをさらに東に行くと、警察の保養所、アンカラの建設省の保養所、DSI（水資源公団）の保養所、PTT（郵便電話電報局）の保養所などが現れる。その間に挟まって、1箇所、料金さえ出せば誰もが入ることのできるビーチがある。PTTの保養所の先にはアンタリヤの農業局の保養所がある。そして、アンカラの道路建設局の保養所がある。そして最後にTRT（トルコラジオテレビ局）の保養所が立地している。以上のように、アンタリヤ市の東部、ララ海岸には、企業、役所、軍隊の保養所が立地している。

これらの保養所の中には、立派な建物だけでなく、かつてトルコ人向け観光客のために浜辺に建てられた非常に簡易な宿泊施設であるオバ⁶⁰に類似する、ブリキの壁で囲った平屋の掘っ建て小屋状の施設や仮設テントも多く建っている。同じ役所の保養施設の中に、異なるタイプの宿泊施設が用意されているのである。オバに類似するタイプのものだと、消費電力だけ払えばよく、宿泊料に相当するものは払わなくてもよい、とF氏は解説してくれた。コーラなどの飲み物も1万5千リラ程度でよいとのことであり、水1.5リットルが町中では5万リラすることからみれば破格の安さである。このようなやり方で、公務員はきわめて安価に夏の保養生活を送ることができる仕組みをトルコは持っている。これはスキャンダルだ、とF氏は憤って語っていた。

なお、TRTより東のアンタリヤ市内には、もう保養施設はない。ただし、海岸一帯は国有である。また、アンタリヤ市の西の郊外には新しい港湾があるが、その西には、林野庁の保養所がある。

ちなみにTRTの保養所に行く手前に、砂丘で松が散在的にはえている

ところがあるが、ここにノマド（遊牧民）的な服装をしたトルコ人が自家用車でやってきてテントをはっていた。砂地に体を埋めると健康によいということで、ここで夏を過ごしているとのことである。そうした家族が多いというわけではないが、しかし、少ないというわけでもない。このようなタイプの海岸での保養を送るトルコ人もいることに留意しておきたい。

Ⅲ. アンタリヤのツーリズム開発とペンション経営

本章では、アンタリヤで経営されているペンションの中で、最も初期に設立されたものを紹介することによって、観光開発とペンション経営の関係を描き出してみたい。この事例としてとりあげるのは、カレイチの中にあるものではない。新市街地ゲンチリク・マハレ Gençlik Mah.（若い街区という意味）にある A ペンションである。ゲンチリク地区は、カラアリ公園を挟んでカレイチの南に位置する。A ペンションのオーナー兼経営者の F 氏に対するヒヤリングは、1995 年 8 月と 1996 年 8 月の 2 回行った⁷⁾。

F 氏は、1983 年と 1985 年にドイツのテレビ局からインタビューを受けたことがある。ZDF（ドイツ第 2 テレビ）と ARD（ドイツ第 1 テレビ）である。どちらのテレビ局も、トルコ観光省からの紹介で来て、彼のそれまでの足跡についてインタビューした。彼は西ドイツでガスタルパイターとして働いた経験を持つ人物である。それゆえ、当時の西ドイツで実施された帰国支援法との関連で、ドイツから帰国したトルコ人で成功した事例を報道するために、両テレビ局は F 氏のところにやってきたものと考えられる。

1. F 氏の略歴

F 氏はカイセリの近郊農村エビジ Ebic で 1941 年に生まれ、そこで育った。村の小学校に 3 年生まで通い、その後、より高い教育を受けるために

別の村にある小学校に4年生、5年生と通った。これは父親の希望によるものだった。その後、カイセリにあるリセ（高等学校）に進学し、ここを卒業した。リセ卒業後、サクンヤト Saknyat で小学校教師として1960年の秋から62年の秋までの2年間働いた。当時、トルコでは学校教師が非常に不足していたので、政府は法律を改正し、リセを卒業した人に対して、教師になれば兵役免除という政策をとった。F氏はこの政策を利用したのである。

小学校教師として働いていたころ、ドイツで働けるという宣伝がたくさんなされ、それに惹かれて1962年10月に職安に応募し、同年11月にケルンのフォード社で働き始めた。これだけ素早くドイツに来ることができたのは、比較的高度の技術や知識を持っている人が優先的にドイツに送り込まれたからである。フォード社ではギヤ工場に配置され、ここで18ヶ月働いた。F氏がリセで習った外国語はフランス語であり、ドイツに来た当時、ドイツ語は全くできなかった。そこで、1963年1月から6月まで、工場勤務のあと、夜間コースでドイツ語を集中的に学んだ。このコースでドイツ語を教えてくれた先生はケルン大学のオリエント講座の先生である、とF氏は30年以上前のことであるにもかかわらず、昨日のこのように語った。

1964年5月から、デュッセルドルフの北東約20kmのフェルベルト Velbert に立地する、BKSという企業に転職した。ここでは通訳として活動した。この企業にはイタリア人など、多くの国からの外国人が働いていたが、トルコ人も男女あわせて60人いた。

1967年に、再び転職した。今度は、もう少しデュッセルドルフに近いメットマン Mettmann に立地するG+F (Georg Fischer) という自動車部品製造企業の工場である。この工場の本社は、スイスのシャッフハウゼン Schaffhausen にある。この企業は、当該部品市場で60%のシェアを占めていたとのことである。ここでもF氏は通訳として働き、同工場の事業所委員会 (Betriebsrat) の委員にも選ばれた。

F氏は、フェルベルトでトルコ人労働者協会 Türkische Arbeitnehmerverein の副委員長として活動したことがあるし、メットマンでも全外国人労働者のための協会で、副委員長に選ばれた。1974年にオランダ系ドイツ人と結婚した。1976年にメットマンにある居酒屋の所有者になり、工場勤務を辞めて自営業者になった。

2. 帰国の意思決定

F氏は1978年頃からトルコに帰国することを考え始めた。最大の理由は1977年に生まれた娘の教育である。このままドイツにいたら、娘は完全にドイツ語しかしゃべらなくなり、ドイツ人化してしまうのではないかと恐れたからだとのことである。また居酒屋の経営にも、それほどの発展性を見出しえないし、興味もわかないと思ったからである。帰国するならば、故郷の大都市カイセリではなく、海岸地帯のいずれかに居を構えたいと思った。海岸地帯は、今後、発展すると感じたからである。とはいえ、F氏は、実は既に1974年に、アンタリヤ市内のバフチェリエヴレ Bahçelievler 地区に、100 m²の住宅を取得していたのである。これが帰国を意識して所有したものか、別荘としての利用を考えたものか、それとも一種の投資として考えていたのか分からない。F氏の語るところによれば、帰国を真剣に考え始めたのが1977年から78年にかけてであって、その理由は娘の教育のことだったというのである。

しかし、帰国を決意するにあたっては、さまざまな要因が絡んでいる。F氏は何も語らなかったが、居酒屋の経営が思うほどにはうまくいかなかった可能性もある。他方で、アンタリヤに新しい人生を切り開く希望を次の事情からいただいたことは確かである。1978年にアンタリヤ市長がケルンに来て、WDR（西ドイツ放送）のトルコ語番組で、アンタリヤに来て事業を営む人にはあらゆる援助を市が行うと話し、トルコに帰国してアンタリヤに投資をするよう呼びかけたのである。

1970年代半ば過ぎともなると、ドイツなどのヨーロッパ諸国に住んで

いるトルコ人の中に、共同出資によって企業をトルコに設立する動きが進みつつあった。メットマンにはカイセリ出身のトルコ人が多く働いていた。この人々はカイセリで企業を起こすために出資しようとしていた。F氏がアンタリヤに投資しようという提案をした際に、何人かの同郷のトルコ人が集まって相談したが、アンタリヤよりもカイセリに投資するほうがよいという意見が大勢を占めた¹⁸。そこで、F氏は1人でアンタリヤに投資することに決心した、とのことである。

1978年9月に、F氏は、現在所有しているペンションの建物と敷地を購入した。この建物は、もともと3家族用住宅だった。その所有者が死亡した後、遺産相続者（3人の息子、3人の娘）の間で、この家全体を誰が相続するか、折り合いがつかなかった。結局、金銭で遺産を分割するという事になったので、この不動産は売却に付された。したがって、F氏がこれを買ったときには、もう誰も住んでいなかった。遺産相続者は、1人の娘がイスタンブルに移住しただけで、あとの者はアンタリヤ市内に住んでいる。また、結婚した息子は、既にこの家から離れて別のところに住んでいた。F氏自身は、この不動産をペンションとして経営するために最初から意識して買ったというよりも、ともかくツーリズム関係の仕事をしうと思って先行投資するという形でこの家を買ったとのことである。

F氏は、カイセリとトルコの地中海沿岸地帯を夫人に見せるために旅行したことがある。夫人もアンタリヤを気に入ってくれた。そこで1978年に帰国した。帰国後、同年に購入した建物を改造した。ところが、市長はドイツのテレビで約束したことと違って、F氏に対してペンション営業を許可しなかった。その理由は、この場所がツーリスト地区としてではなく、住宅地区として指定されていたからである。だが、建物の前の通りを挟んだ向かい側は、海岸よりというだけでツーリズム地区として指定されており、ペンション営業が可能だった。そのために、市の決定はあまりに拘り定規である、とF氏は不満に思った。

F氏がどうしてもここでペンション経営をしたいのであれば、市の所有

地である公園側にある駐車場を、F氏のペンションに来るお客が使用する料金として、年間35,000マルクという法外な料金を要求したとのことである。これはペンション経営を実質的に不可能にさせるための要求だった、とF氏は語った。F氏は非常に憤りを感じたがなす術もなく、しばらくの間、ペンション事業を始めることができなかった。

1980年まで、アンタリヤの政権を握っていたのは国民党（CHP）である。しかし、この年の9月にクーデタがトルコで発生し、アンタリヤでも軍人が市政の実権を握った。そのもとで、F氏に対してペンション営業が許可された。

ちなみに、ドイツ帰りのトルコ人で、アンタリヤでペンションやホテルを経営している人は多くない、とのことである。F氏の知っている限りにおいて、アンタリヤにもう1人いたが、この人は先年亡くなり、その息子が資産を賃貸に出している。ララ海岸のTepe Hotelの経営者もドイツ帰りだとのことである。

3. ペンション経営の隆盛

ペンション経営を始めるためには、資金を必要とした。例えば、下水道システムが完備していなかったため、浄化排水処理施設を自分で設置しなければならなかった。家屋改造も含めて450万リラの資金を銀行から借りた。当時1マルクが25リラというレートだったから、18万マルクということになる。この融資は小規模なペンションを経営する人に対する特別融資であり、1年間の返済猶予、7年間で返済、最初の3年間の利率が17%、残りの期間の利率が50%という条件だった。借金額は、当時のレートで日本円に換算すると約2千万円になる。これをF氏は既に全額返済したとのことだから、また後述のように、いくつかのほかの不動産を購入する余裕もあったので、ペンション経営は成功したと言ってよい。とはいえ、インフレが激しいトルコであるがゆえに、上のような高利率でも返済できたという側面もあろう。

ペンションにお客を呼び込むために、F氏は1981年夏のシーズンのために、*Süddeutsche Zeitung* (南ドイツ新聞) と *Neue Ruhr Zeitung* (新ルール新聞) に広告を出した。しかし、これはあまり役に立たなかった。そこでトルコの新聞に広告を出した。トルコの新聞はトルコ国内だけでなく、ドイツでも発行されているために、イスタンブルやアンカラからだけでなく、ドイツに住んでいるトルコ人もその広告でF氏のペンションのことを知り、お客としてやって来るようになった。その後は、口伝えてこのペンションが宣伝され、順調にお客が来るようになった。

1981年はトルコ人旅行客しか来なかったが、1982年からドイツ人など、外国人の観光客も増えた。アンタリヤには観光客向けのホテルが1981年に5軒、ペンションが6軒しかなかった時代である、とF氏は語った。6軒目のペンションがF氏のペンションであった⁹⁾。ドイツからのお客はノルトライン・ヴェストファーレン州とバイエルン州からが多かった。国内ではイスタンブルとアンカラからが多かった。

アンタリヤの観光客・ブームは、F氏の記憶の限りで、1982年頃から始まった。前述のように、また注(9)で述べたように、アンタリヤ市のレジャー観光客向けの宿泊施設は著しく増えたわけではないし、設備が老朽化し、ヨーロッパからの観光客にとってはサービスも悪いと映ったはずの中級ホテルですら繁盛していたのだから、設備の新しいF氏のペンションが繁盛したであろうことは想像に難くない。当時、アンタリヤにきた観光客はパッケージツアー客が少なく、個人観光客が多かったとのことである。ヨーロッパから自動車で来る観光客も多かったという。

しかし、海岸はまだ外国人観光客向けに開発されていなかった。現在、ララとならんでアンタリヤ市内の重要な海水浴場となっている、アンタリヤ市中心部の西に数キロメートルにわたって続くコンヤアルトゥ海岸(写真12参照)で、F氏と1980年に生まれた彼の息子が一緒に写っている1982年の写真を、筆者は見せてもらったことがある。この写真による

と、その海岸には、トルコ人観光客のための宿泊施設であるオバが写っている。オバについては注(6)で説明したが、コンヤアルトゥ海岸のそれは、アンタリヤ市が一般市民に賃貸した夏の宿泊施設である。6月15日から9月15日まで賃貸した。このようなオバが立ち並んでいたコンヤアルトゥ海岸は、外国人観光客のための場所としてではなく、トルコ人のために利用されていたと言える。ちなみに、現在でも、アンタリヤ県の南西に位置するクムルジャ Kumluca (フィニケの近く)にはオバがある。ここにF氏は別荘を持っている。

コンヤアルトゥ海岸のオバについては、ドイツの地理学者でトルコ研究の泰斗 Hütteroth (1982, S. 444)も触れている。彼は、1974年当時コンヤアルトゥ海岸に3kmにわたってオバが密集して建てられていた、と記録している。また Rauh (1979, S. 40-43)も、写真付きで、注(6)で述べたオバの概要と同じことを、詳しく述べている。現在、この海岸のアンタリヤ市街よりには、市内最高級ホテルのシェラトンホテルやホテル・フェレーズの泊まり客のための専用ビーチがある。その宿泊客の少なからぬ部分が外国人である。それゆえ、かつてトルコ人観光客のための海岸保養地だったコンヤアルトゥは、現在、外国人観光客のために利用されるようになったといってもよい。とはいえ、その専用ビーチのさらに西は一般に開放されているビーチとなっており、ここにトルコ人観光客が多数来ている。筆者らの観察によれば、段丘の上にある高級ホテルの外国人泊まり客の少なからぬ部分が、海岸ではなく、ホテルのプールで日中を過ごすことが少なくない。海岸の保養地に米ながら、海水浴ではなく、宿泊施設のプールを好んで利用する傾向がヨーロッパ人観光客にみられるのは、この高級ホテルの泊まり客だけでなく、ケメルのホリデービレッジでも観察された。

話題をF氏に戻そう。F氏はツアーガイドの資格を持っている。ツアーガイド資格試験は観光省が実施しているもので、アンタリヤでは1980年に初めてそのための講習会が開かれた。3ヵ月間の講習を28人が受けて、

そのうち24人が合格した。F氏は2番の成績で合格した。講習のための費用は観光省が負担したが、合格者に対して1週間の実地研修が行われた。この実地研修のための旅行費用は自己負担だった。当時、英語のツアーガイドが多かったが、イタリア語が1人、ドイツ語が2人（ドイツ帰り）、アラビア語が1人、フランス語が2～3人だった。ツアーガイドになった人の多くはリセの先生だった。

ペンション経営とツアーガイドの両方で、かなりの収入を得たのであろう。F氏は1984年に、アンタリヤ市街の東の郊外にあたるララに土地を購入し、1988年に住宅を建設し始めた。2年間でこれが完成し、1990年にそこに転居した。ペンションから7kmほど離れたところである。F氏がララに土地を購入したころ、この地区にはホテルが10軒ほどしかなかった。彼の新しい住宅は半地下の部分も含めれば実質4階建てと大規模であり、懇意にしているツーリストには、長期滞在保養用に4階部分を賃貸することがある。彼は自宅からペンションまで乗用車（ベンツ）で通勤して仕事をしている。ほかに、アンタリヤ市西部の郊外にオレンジ農園も所有しており、ペンション経営のかたわら、夏には農園の経営のために、そこに出かけたりしている。

現在、ペンション経営のために2人雇っている。1人は夜間のレセプションと朝食サービス係りの男性である。彼はスイスで4、5年働いたことがあり、ドイツ語をある程度話すことができるし、フランス語も少しできるとのことである。もう1人は掃除兼ベッドメイキングの女性である。昼間のレセプションはF氏かF夫人がやっている。学校が休みのときには、息子も手伝うことがある。娘は、既にリセを終えて、あるチャーター飛行機会社のアンタリヤ事業所で働いている。夫人は前述のようにオランダ系ドイツ人である。トルコ語をきちんと学校で習ったことはないが、トルコ語会話に熟達している。日常生活の中から、また子供の学校教科書などを一緒に勉強することによって、自然と学んだとのことである。

4. ペンション経営とインフラ・公共サービス

F氏がペンション経営を始めたころ、上水供給の問題はなかった。しかしゴミ処理の機能はひどいものだった。週1回しかゴミの回収に来ないので、道路にゴミがあふれ、悪臭がただようほどだった。社会党政権の時代は、公共機関の機能はうまく回転しなかった。オザル政権の時代になってからようやく改善され始めた。ゴミ処理は民営化されてからうまくいくようになった、とF氏は評価している。現在は毎日回収され、問題はない。なおホテル・ペンション経営者は、ゴミ処理費用としてベッドあたり1年に5万リラ払わなければならない。

下水処理施設はまだない。アンタリヤ市は、1993年から新しい下水施設網を建設している。しかし、岩盤がかたいため、工事の進捗は遅い。この理由に加えて、F氏は、十分な資金の手当てができないままに工事に入ることがあるので進捗が遅くなるのだと解説した。下水処理施設網は1999年には完成すると期待されているが、どうなるか分からないとF氏はみている。実際、新しいオトガルは2年前に完成予定だったが、1996年秋にようやく完成する。野菜・果物出荷場は3年前に完成予定だったが、ようやく1996年に完成した。このようなインフラ整備はトルコでは遅れがちなのである。

下水施設整備のために、実際にはアンタリヤ市は世界銀行から融資を受けている。市の財源は、基本的には市民が納める家屋税と土地税である。これ以外に中央政府から人口に応じて割り当てられる財源があるが、その人口は居住登録人口なので、夏に人口が倍増するアンタリヤ市のような都市にとって、中央政府からの財源割当制度は不利に作用する。さらに、地方銀行 (Iler Bankası) がインフラ整備のために融資する。こうしたさまざまな財源を通じて下水処理施設網の整備を進めている。一般市民は、水に関して上水料金と下水料金の2つを毎月納入している。前者は上水の使用料金だが、後者は下水処理施設網整備のための財源に使われている。将

来的に、アンタリヤ市は下水浄化施設を2つ設置することになっていると
のことである。1つは、市の西部にある港のそばに、もう1つは東のララ
の後背地に建設することになっている。

なお、一般家庭の場合、20トンまでの上水を利用すると1トンあたり2
万1千リラの料金がかかる。20トンを越えると1トンあたり10万リラに
なる。さらに下水道料金として18万リラかかる。F氏は、1996年7月分
の料金として、全体で851,250リラの料金を水のために支払った。8月分
はもっと高い料金を支払うことになるとのことである。

現在の下水処理は、各家屋ごとに地下に埋設した3つのタンクで順番に
下水を処理し、これを最終的にはその場所の土のなかに流し込んでいる。
しかし、その処理で十分かどうか、疑問である。大都市における不法占拠
集落のトルコの形態であるゲジェコンドゥの住宅家屋は、1つか2つのタ
ンクしか用意していない。浄化装置を用意しないと悪臭がするから、ゲ
ジェコンドゥといえども簡易な浄化タンクは設置されているはずだが、埋
設の程度が粗悪なことが多いという。ゲジェコンドゥでは選挙前になると住宅
建設が活発化する。選挙民の歓心を買うために、政治家が違法建築に目
をつぶるからである、とF氏は解説した。そのような理由で、下水浄化装
置も不十分だということである。なお、F氏のペンションの場合、最終的
には地下4~5メートルのところ下水道を流しているとのことである。地下
に下水を流し込む場合、もっと深い所に流し込んでいる場合もある。大規
模ホテルは独自に浄化装置を設備し、沖合に流している。下水処理が以
上のような実態にあるので、アンタリヤの貴重な観光資源である海その
ものが汚染し、ツーリズムに打撃を与える可能性がないとは言えない。

5. ペンション経営の転換期

1990年代に入ってユーゴスラビアで内戦が始まると、ドイツなどから
自動車でトルコまで来ようという人は激減した。イタリアまで自動車
で来て、そこからフェリーでトルコに来るという道もあるが、フェリー料金は

高くつくために、やはりこうした個人ツアーリストの増加は望めない状態だった。ドイツの大手旅行代理店は、飛行機と大ホテルを組み合わせたパック旅行をますます優先的に扱うようになり、ツアーリストもそちらに流れるようになった¹⁰⁾。その結果、このような小さなペンションは不利になった。そうはいても、このペンションは、なじみ、あるいはなじみの知り合いがコンスタントに來ているものと推測される。筆者らが1995年8月にヒヤリングのために訪問したときには、オーストリアからのお客が帰国するところだった。また、1996年8月に筆者らがF氏のペンションに滞在している間に、ドイツから乗用車でフェリーを使ってイタリア経由で來た大学教授夫妻が、このペンションに宿泊したこともある。この夫妻は1泊しかなかったが、オランダ人の初老夫妻は比較的長く滞在した。

ほかに、1996年夏に筆者らがAペンションに宿泊していた際に、ここに宿泊した人たちは次の通りであった。カラアリ公園横にあるスタジアムの照明設備電気関係の工事をしていた4、5人のトルコ人たち。7、8歳の子どもを連れたトルコ在住のトルコ人家族。F氏の親戚のドイツ在住トルコ人姉弟。姉は子ども1人をともなっていた。他方、弟は許婚者を伴っていた。この許婚者はオランダ国籍トルコ人であり、現在ドイツのケルンの旅行代理店で働いている。姉弟は、約3週間の里帰り保養にトルコに來ていたのだが、故郷はカイセリでありながらそこには1週間滞在しただけで、むしろアンタリヤにより長く滞在していた。F氏はフランスからのグループ旅行者と言っていたが、フランス人というよりもトルコ人的風貌をしていた数人のグループも宿泊した。さらに、正体の分からない、うら若い女性も1人泊まっていたことがある。ミニスカートをはいて朝散歩に出かけたりしていた。

F氏のペンションは確かにそこそこ繁盛しているし、国際ツアーリストも利用する。しかし、国際ツアーリストは個人的にトルコを訪れるツアーリストか、在外トルコ人に限られている。ここに宿泊するお客の半数以上はトルコ国内に住むトルコ人となっているし、それにはもはやレジャーツアーリス

トの範疇に入らない人々も含まれるのが現状である。

町中のツーリストに対する土産物屋とカレイチのペンションについては、次のような認識をF氏は持っている。前者は衰退傾向にある。その理由は、観光客が買わないからだ。そうした土産物屋は、コストに比べて極めて高い値段をつけるので観光客は買わない。もう1つの衰退理由は、大手の土産物店チェーンが郊外に大規模な店をつくり、バックツアーで来たツーリストをガイドが連れていき、そこで買い物をすませてしまうからである。そうした大規模店の商品は、アンタリヤ市内のものよりもかえって高い値段だが、ツーリストは比較できるわけではないので、その価格で買ってしまう。もちろん、このような大規模店はリポートをガイドなどに払う。

他方、カレイチのペンションの所有はどんどん変動している。所有者はアンタリヤ以外の所に住んでいる人が多い。トルコ全体に所有者は分散している。農民もいれば、公務員もいる。労働者、商人でペンションを持っているものもある。トルコへのツーリストはチープツーリストであり、消費をあまりしない。ホテルに飲み物が備えてあっても、外で買ってきて消費している。飛行機がドイツとトルコの間で700マルクもするのに、1週間のバックツアーの値段がこれよりやすい。これではもうかるはずがない、とF氏は述べていた。

アンタリヤをめぐる国際ツーリズムの現状を上のように見ているF氏は、ペンション経営から引退することを決心している。息子はまだリセに通っている年齢であるが、年金生活に入るのだと述べた。それだけの貯えがあるということであろうが、同時にペンション経営の将来展望が暗いからでもあろう。現在のようなマスツーリズムの時代に、ペンションという容細規模の経営ではやっていけないと見ているのである。しかし、ペンションの土地と建物を手放すつもりはない。ペンションを経営したいと考えている人を見つけて賃貸するつもりなのである。つまり、ペンションのオーナーは続けるが経営からは手を引くということである。息子もペンション経営を引き継ぐ意思を持っていないのである。

IV. アンタリヤ旧市街地のペンション群

1996年8月に、カレイチに立地するペンションのいくつかにヒヤリングを行った⁽⁴⁾。ヒヤリングの対象としたペンションは、全体を代表するものでは必ずしもない。これらは、この土地のキリム屋から特徴のあるペンションだという情報を得たり、また、外観から判断して有力なペンションに含まれると考えられるものである。キリム屋というのは、カレイチで絨毯の一種であるキリムを販売する日本人女性とその夫のトルコ人のことである。このトルコ人は1992年からアンタリヤ市に住み、1995年から、あるペンション経営者が所有する建物の一部を借りて、観光土産店としてキリムの製造、修理、販売を行っている。そのため、ここでの観光産業の動向に詳しい。このようなヒヤリング対象の選定のゆえに、かえって、アンタリヤのカレイチに立地するペンションの典型的姿が、やや誇張された形であるにせよ、浮かび上がるものと考えられる。

1. 相対的に経営が安定しているペンション

(1) Mペンション

最初に、上記のキリム屋夫妻の家主である、Mペンションから紹介しよう。オーナー兼経営者であるH氏は、43歳の男性で、少なくとも代々200年はカレイチに居住してきたと自称するカレイチっ子である。アンタリヤで27番目に電気を引いた山緒ある家柄だとのことである。現在の居住地はカレイチではなく、3年ほど前にペンションから車で10分程度の郊外にマンションを購入し、毎日ペンションの管理に通っている。ペンションを開業したのは決して早くはない。1989年のことである。それ以前、この建物は普通の民家でありH氏の自宅だった。1988年にもとの家屋を極力残す形で、ペンション経営のための最低限の改装を施した。改装費は約25,000ドルで、銀行等からの融資は一切受けずに自力で捻出した。資

金源はそれまでの貯蓄だとのことである。

営業開始当初の部屋数は6部屋あったが、客があまり来なくて収入が不安定なので、1995年10月に、1階部分を改装して店舗にした。これを、キリム屋夫妻とレンタカー屋に賃貸している。1階には間口2間程度のペンションのレセプションのみを残している。現在の部屋数は2人部屋1、4人部屋1、5人部屋1の3部屋で、合計11ベッドという小規模なペンションである。料金は一般に、2人部屋一泊で150万リラ、5人部屋を3人で200万リラ、長期滞在者は5人部屋の相部屋が、1ベッドあたり50万リラである。ただし、冬期のオフシーズンには値引きするし、夏でも交渉次第で値引きには応じるという。

年間の宿泊客数は延べ約千人程度で、基本的にはトルコ人を中心とした長期滞在者が多い。夏にはドイツ人や日本人の個人旅行者も宿泊し、平均宿泊日数は15日とのことである。しかし、キリム屋夫人によれば、宿泊者はほとんどがロシア人商人や、ルーマニアから売春にきた女性、あるいは保養にきたトルコ人家族であり、1~2ヵ月近く滞在するとのことである。観光目的の個人旅行者がこのペンションに泊まるとすれば、それはキリム屋で斡旋した日本人旅行者がほとんどだとのことである。なお、紹介料は一切とっていないという。

客室は、H氏によれば、夏で80%、その他は60%うまるとのことである。また、夏以外の客はほとんどトルコ人ビジネスマンであるという。しかし、キリム屋夫人の観察によると、夏の稼働率はその程度だが、その他はとて60%に達していないとのことである。特に冬は、たまに日本人学生が宿泊するぐらいで、ほぼゼロに等しいとのことである。ただし、キリム屋は、ここでもまだ1冬しか経験していないため、H氏の言が間違っていると断言できるわけでは必ずしもない。両者の言がどちらも正しければ、それは1995年の冬に、このペンションに宿泊する人が、それまでと比べて激減したということになる。

客が全くいない冬場でもペンションを閉じることはない。H氏自身は、

現在のペンション経営は利益もあがっているので、今後も継続したいと述べている。むしろ、部屋数を増し、経営規模を拡大したいという意向を持っている。

M ペンションでは、労働力としてアンタリヤ在住のトルコ人を1人雇っている。彼は、レセプション・部屋掃除・夜番などのすべての労働をこなしている。ペンション開設当初の2年間は別の人を雇っていたが、信用できないので解雇したとのことである。その後は、途中の兵役期間を除いて、上記の人をずっと雇っている。彼の通勤時間は徒歩で20分以内である。昼間の11時から15時くらいまでは、H氏がレセプションを担当するが、その他は彼が全てする。この雇い人の月給に関する質問にH氏は曖昧にしか答えなかった。一般論として、150万～200万リラ（ドル換算で約180～200ドル）だとのことである。H氏が不在中に、当の雇い人に確認したところでは、月に80万リラだった。一般にカレイチでは、絨毯屋のフルタイムアルバイトの月給が150ドル前後だということなので、この雇い人自身は不満を持っていて、「辞めたい」と言っていた。H氏は経営状態が良好と述べていたが、1996年春に、2階のペンション部門の賃貸をキリム屋に打診してきたことがあるので、実際には、ペンション経営は苦しいと思われる。

ちなみに、M ペンションの納税額は、1993年所得5,720万リラで所得税1,556万リラ、同様に1994年所得1億3,980万リラで所得税3,819万リラ、1995年所得2億7,880万リラで所得税7,614万リラであった。

M ペンションは、観光省の末端機関であるアンタリヤ観光協会と全く関係を持っていない。市役所との関係は、改装時に景観保存部門の窓口で改装申請に行った程度とのことである。申請の手続きは、まず改装前の写真を添えて申請書を提出し、改装後に改装前と外観上の変更がないかどうか、市役所からの審査が入り、それにパスして開業許可証が発行された。現在、レセプションには、5種類の免許・許可証類が掲示されている。第1に開店許可証明書で、これは過去の犯罪歴の有無が審査された上でアン

タリヤ県警察から発行される。第2に週末・休日労働許可証で、これはアンタリヤ市が発行する。ペンション経営者だけでなく、サービス業のほとんどが保有している。第3に、国税庁発行の納税証明書である。第4に、労働省から発行される営業登録証明証である。これは、5年毎に更新され、その際に手数料をとられる。第5に、専門業種許可証である。H氏によると、これらのうちペンション経営に必要不可欠なのが第1、第2、第4の許可証だとのことである。カレイチ内で営業しているペンションの経営者のなかには、こうした免許・許可証類を持たない者も少なくないという。

H氏の友人の情報によると、旧市街を景観保存的に再開発する新しい市街地計画があるとのことである。そのため、カレイチ内の高層ビルや新式の建築物は、西暦2000年までに壊されるか、立て直されるであろう。このような再開発が行われるならば、無免許経営者は経営権を剥奪されるであろう、とH氏は予測している。

今後のカレイチのペンションでは、経営者の交代がますます激しくなるであろう、とH氏は予想している。その理由として、彼は、ツーリストの絶対的減少、ペンション経営や観光産業に疎いプロでない経営および経営戦略、地代・賃貸料の大きな負担を挙げた。Mペンションの立地する付近について言えば、乗用車やタクシーが頻繁に往来して観光客が立ち止まれる状況にないので、市が車両の通行を規制して環境整備を行えば、ペンションや土産物屋の経営状態も好転するであろうと予測している。H氏いわく、市には既にそういう市街地整備計画が存在するが、なかなか実行に移されないらしい。イヴリミナレからマリーナに下りる道路は、既に乗用車の通行が封鎖されたので、ペンション・土産物屋ともに、売り上げが大きく伸びたらしい。逆に、彼のペンション界限はかえって交通量が増加し、ますます、観光客が立ち止まれなくなったと、強い不満を表明していた。上記のキリム屋も同意見であった。

H氏には、カレイチの全般的なことも自由に話してもらったので、その要点を以下にまとめておく。彼の幼少の頃、カレイチ外のオトガル（バ

スターミナル)のあたりは畑ばかりだった。他方、現在シェラトンホテルが立地するあたりは森林だった。ペンションが建ち始める以前のカレイチの土地は、ほぼ地元のカレイチっ子が所有していた。ペンションが少数ながら建設され始めたのは、1984年頃からで、同時に外資系のホテルも建設され始めた。ペンション建設が急増するのは、1990年代にはいってからで、地元のカレイチっ子はペンション経営に参入するか、古くなった家屋をよそ者に売って、カレイチ以外のアンタリヤ市内に住むようになった。カレイチっ子が自らの土地と家屋を利用して比較的早くからペンションを経営した例としては、Kペンション、Eペンション、Dペンションが挙げられる。

以上のようなH氏の記憶は、前章までに記したアンタリヤ市における宿泊施設産業の発展動向とほぼ平仄があう。

(2) Kペンション

H氏が挙げたKペンションのオーナー兼経営者の家族構成は、S氏(80歳)とその息子(46歳)、及び息子の家族である。S氏はギリシャ領生まれのトルコ人で、アタテュルクのギリシャ・トルコ間住民交換政策により、5歳の時にカレイチに来て、それ以来ずっと住みつづけている。移住当初に現ペンション(3戸一)の角地の区画を、土地・家屋付きで政府から与えられた。この他にも、現在のアンタリヤ空港付近に農地を与えられ、移住当初は農業を営んでいた。現在、彼の土地は合計して1ドヌム(約千 m^2)になる。1951年に、現在のペンションがある角地でバックカル(食料品店)を開業した。ペンションを開業したのは1981年だった。ペンション経営は息子のすすめによっている。

1981年当時のカレイチにはペンションが5軒ほどしかなく⁽²⁾、開業当初はよく儲かった。1981年には既に景観保存に関する法律があって、ペンション経営と改装に際しては、文化・観光省と景観保存委員会の認可を受ける必要があった。息子家族の自宅は現在、アンタリヤ博物館付近にあ

るが、S氏はこのペンションに住んでいる。

最近、土地・家屋を買い足して、棟続きの新Kペンションを、1996年4月から新装開業している。この新装開業に際して、老朽化していた旧Kペンションとバックルも含めて、改装工事を行った。改装期間は6~7カ月で、土地代も含めて約20億リラかかった。改装・土地購入費用は、公務員であった息子の退職金、S氏の土地の一部を売った代金、車や貴金属を売った代金で上回した。改装・増築の許可が下りるまでに、1~2カ月かかった。文化・観光省に申請して、建築家を雇って設計してもらい、文化・観光省と景観保存委員会の規則に合致するかどうかを審査され、ようやく許可が下りた。経営は旧ペンションとバックルをS氏が、新ペンションを息子が担当している。

現在の部屋数は新旧両ペンションを合わせて、1人部屋が1、2人部屋が3、3人部屋が2、合計6部屋で13ベッドになる。宿泊料は旧ペンションの方が1ベッドあたり25万リラ、同様に新ペンションの方が50万リラである。旧ペンションは設備も古く汚いので安くしているのである。

ペンション経営は全て家族労働力でまかなっており、雇用者はいない。レセプションや掃除等は全て息子が担当し、S氏も手伝う。夏場は高校生の孫娘がレセプション等を手伝う。下の孫娘はまだ9歳なので何もしない。息子の妻は学校教師をしているので、基本的にはペンション経営には関与しない。夜番はS氏が担当するが、夏場の満員時には、息子も新ペンションで夜番をする。

旧ペンション部の客層に関しては、トルコ人や仕事できたロシア系の長期滞在者が多い。夏場は、トルコ人以外では、ドイツ・オーストリアからの個人旅行者と、ロシア・東欧・中央アジアからの仕事目的の客が多い。夏場にはトルコ人が約半分を占める。中央アジア系の宿泊客は観光客ではなく、ロシア人観光客向けの店に勤めている出稼ぎ労働者である。ウズベキスタン・キルギスタン・カザフスタンから来た人が多い。夏場の客室稼働率は月によって異なる。1996年の場合、6月は少なかったが、7

月は多かった。70～80%程度の稼働率だとのことである。冬場は仕事目的のトルコ人客が約80%を占め、残りは避寒にきたロシア人が多い。稼働率は冬場でも50%程度はある。新ペンション部は開業してまだ間がないが、トルコ人観光客と欧米の個人旅行者が多い。広告は特にしていない。オトガルの客引きからの宿泊客の導入もない。

このように、比較的順調に経営されているペンションではあるが、キリム屋夫人によれば、売春にきた長期滞在女性が旧ペンションによく泊まっていたとのことである。

(3) Hペンション

経営が比較的安定しているペンションの事例として、もう一つ、Hペンションを挙げることができる。このペンションのオーナーは1994年にトルコ国籍をとったベルギー人女性（フラマン語圏出身）である。彼女の兄は、シリアに近いシャンルウルファ県シベレキ出身の1955年生まれのトルコ人女性と結婚した。子供2人をもうけており、同様にトルコ国籍を取得している。Hペンションのオーナーである彼女はアンタリヤ郊外に住むが、兄夫婦が同ペンションに寝泊まりして管理している。

このペンションの経営は1990年からで、さら地を購入してペンションを新築した。外国人が土地を入手するのは困難だったし、営業許可証の取得も難しかった。

部屋数は2人部屋が10室、3人部屋が2室の計12部屋であり、ベッド数は26である。宿泊料は外国の旅行者は2人部屋で75マルク、トルコ人国内旅行者は50マルクに設定している。ペンション経営はオーナーの兄が、2人の地元のトルコ人を雇って行っている。

1996年夏の客はトルコ人と外国人の比率が7:3程度である。例年と比べて、トルコ人の比率が低下し、外国人比率が上昇した。外国人の宿泊者の国籍は、ベルギー・フランス・イタリアの順に多い。平均宿泊日数は14日ぐらいである。旅行エイジェンシーとの取引はないが、ベルギー在

住の母が時折ベルギーで新聞広告を出したり、彼女のコネで知り合いなどが宿泊する。例年の夏場の客室稼働率は100%近いが、1996年は60~70%程度である。1995年の秋から96年の春にかけての稼働率は非常によく、欧米からの観光客を中心に80%近くあった。冬にトルコ人が宿泊することは少ない。

2. 不安定なペンション経営

経営者が所有者でもあるペンションの経営は、比較的安定している。しかし、上記のキリム屋夫妻によれば、カレイチのペンションの経営者はよく代わる。これらの経営が不安定なペンションは、大きく2つの類型に分けることができる。一つは経営者が代わってもペンションの名前が変わらない場合である。もう一つは経営者が代わってペンションの名前も変える場合である。数的には、前者のほうが後者よりも多い。ペンションの名前を変えない理由は、アンタリヤを訪問する旅行者はリピーターが多く、ガイドブックにも旧名で掲載されているからで、名前を変えるとデメリットしかないからである。経営者が店の業務を行ったり、旅行客と接することは余りないので、経営者が代わっても基本的には問題ない。この代表として、Cペンションが挙げられる。

後者の場合には、売春や違法営業等で警察の手入れを受けて営業停止をくらい、ペンションのイメージを変えるために、名前も代えてしまうような場合もある。しかし単に、経営者が代わって名前を一新する場合のほうが多い。ペンション経営者には、地元のカレイチの人以外では、コンヤ・ウスパルタ・イスタンブル等のアンタリヤ以外の出身者が多い。彼らの前職は、ペンション経営と関連しなかったことが多い。以下、最近、経営者が代わったペンションの事例を紹介しよう。

(I) Cペンション

Cペンションは、オーナーのC氏が経営している。彼はブルドゥル出

身の28歳の男性で、英語とドイツ語がしゃべれる。アイドゥンのアドナンメンデレス大学の観光学科を卒業後、エーゲ海岸きってのリゾート地であるクシャダスで、小さなホテルのレセプションをして金を貯め、23歳の奥さんと結婚してすぐ、カレイチでペンション経営を1995年10月から始めた。子供はまだいない。

彼が所有しているのはペンションの建物であり、敷地は元カレイチ住民で現在はアンタリヤ市内の別の場所に住んでいる老年の女性のものである。C氏は彼女に3年契約で年間2億リラの賃貸料を、1996年3月から支払っている。賃貸時の保証金は一切なく、C氏自身は安い賃貸料だと思っている。高くついたのは、ペンションの建物と設備の方だった。C氏は前のペンション経営者から、ペンションの付帯設備の一切合財を12億リラで購入した。物件購入後は、厨房の設備と付帯する土産物屋を少し改修した程度で、ほとんど手を加えていない。ペンションの名前は前経営者からのものを継承した。悪い名前ではないし、ガイドブックにもその名前が掲載されているから、変えようとは思わなかった。現在のペンションの形態に誰がいつ頃改修したかは知らない。前の経営者は、シリアに近いアンタクヤのイスケンデルン出身で、外国語がまったくわからず、2人の使用人を雇って、1年間経営しただけで失敗したとのことである。前経営者は現在、アンタリヤ市内でレストラン経営に転業している。ペンション物件情報は、前経営者が出した新聞広告を見て知り、直接対面して交渉した。

ペンション経営の現状については、必ずしもよくはないが、夫婦2人で働いて充実感があり、まあまあ満足しているとのことである。以前働いていたクシャダスのホテルは冬に閉めたが、ここカレイチは冬にも宿泊客がいて1年通して働ける。冬には専用ビーチを持つ海沿いのホテルはがらになるが、カレイチには一般観光客や避寒にきたロシア人やビジネス客がくる。1996年の冬には客室が全てうまったこともあった。少なくとも賃貸契約した3年間はここでがんばるつもりであり、新しいホテルもたくさんできるのであろうが、ここは立地がいいし、宿泊費も安いので経営して

いけると思う、とC氏は語っていた。

現在の部屋数は、2人部屋が4、3人部屋が1、4人部屋が1の合計6部屋15ベッドで、全室にホットシャワーとトイレが付いている。敷地内には、土産物屋・レストラン・バーコーナーを設けている。宿泊料は夏場で2人部屋が100万リラ、1人で占有すると75万リラになる。冬場は同じ部屋を1人で60万リラに値下げしている。1週間以上の長期滞在者には10%の値引きをする。

ペンション経営は夫婦2人の労働力で、レストランでの食事の提供等一切をまかなっている。我々が訪問した際には、C氏の姉が家族で遊びに来ていて、保養半分手伝い半分といった感じだった。手伝いを雇いたいと思うが、賃金の支払いを考えるととても雇えないし、信頼もできない。何とか利益がでるのは、敷地を安く借りて、夫婦で経営しているからだろうと思っている。

宿泊客はトルコ人が70%近く占める。保養にきたトルコ系ドイツ人も宿泊するが、多くはイスタンブルやアンカラからの行楽客である。ただし、秋から冬には仕事目的の人が多かった。トルコ人以外ではベルギー人・イギリス人・フランス人・アメリカ人の順で多い。日本人もたまに来る。彼らは個人旅行者である。

ペンション経営の許可証は、犯罪歴がない限り簡単に取れる。まず開店前に、土地権利書・家主との契約書等をアンタリヤ県に提出し、最終的な許可はアンタリヤ市警察からおりた。全ての手続きに3~4ヵ月かかり、営業開始前に市の方から視察が来て、あちこち詳しく点検してまわった。官僚主義的だと思う。観光協会の御墨付きは別の基準で評価されるので、改装が必要になる。金がかかるので取得する気はない。

(2) Iペンション

IペンションもCペンションに似ている。しかし、経営状態はもっと悪い。経営者は35歳の男性である。生まれたのはアンカラだが、育ったの

はブルドゥルである。高校卒業後にドイツの大学で電気工学を勉強し、5年間過ごした経験を持つとのことである。とはいえ、ドイツ語会話は困らない程度である。前職はララヤ、エーゲ海岸のマルマリスでホテルの支配人をしてきた。

Iペンションの土地は賃貸で、1993年から5年契約で借りている。96年時点での賃貸料は年間4億リラである。初年度はマルク建てで実質的にはもう少し高かった。年々賃貸料を家主と交渉して下げてもらっている。ペンションへの改装は1990年に家主が行い、売りに出したとのことである。家主はこの敷地に居住するカレイチっ子であったが、現在はアンタリヤ市内の別の場所に居住している。このペンションの経営者は1993年に小さなバーコーナーを増設しただけである。ペンション経営のきっかけは、この家主が知り合いで、経営をもちかけてくれたことにある。

夏場のペンション業務は、経営者とアンタリヤにあるアクデニズ大学の男子学生と2人で行っている。学生は黒海方面のシノプ出身である。彼の月給は約150ドルであり、雇い人としては高めである。経営状態はよくない。その理由は、ペンションの乱立による過当競争と、Iペンション周辺の通行量の少なさなどの立地条件の悪さが挙げられる。このペンションは日本語のガイドブックにも掲載されているが、1996年はほんとうに客が少なく、困っていた。冬場は外国人観光客が少なく、仕事関係のトルコ人が多い。経営状態をよくするには、レストラン等を拡充し、部屋数を増加するのがいいだろうと考えているが、実際のところ、できることならペンション経営はもうやめたいと語っていた。

(3) Yペンション

売春に関わる例として、Yペンションを挙げることができる。この建物は普通の民家だったが、クルド人の女性がドイツ人男性から金銭的援助をしてもらって、1987年頃に建て直された。設立直後から売春を斡旋するようになり、地元カレイチのトルコ人の中では「女が買える」ペンション

ンとして有名になっている。売春婦はほとんどがロシア人かルーマニア等の東欧人で、買い手はトルコ人が多い。欧米からの団体・グループの観光客は、ファミリーかカップルが中心なので、あまり買わない。海外からの観光客で女性を買うのは、個人旅行者がほとんどである。売春は、このペンションでなされるわけではない。客が斡旋された女性をタクシー等で連れ出し、別の場所で「自由恋愛」として行われる。それゆえ、このペンションは売春宿というよりも、売春斡旋宿と言った方がより正確である。

Yペンションは、たびたび警察の手入れを受けて、警告的に休業にされたことがある。現在、オーナー兼経営者であったクルド人女性は、警察の手入れ後に別の経営者を雇い、当人はオーナーとして賃貸料で収入を得ている。警察による手入れ・休業は、設立後より何回かあり、そのたびに名前も売春の実態も変化せず、経営者だけがすげ替えられている。歴代経営者はクルド人だったとのことである。このペンションは、カッパドキアの旅行代理店と契約していて、カッパドキアからの日本人ツアーがその実態を知らずに宿泊することもある。我々が1996年8月24日の午後4時頃、聞き取りのため訪問したところ、観光協会から過去に授かったプレートは、文字が消えるよう削りとられていて、そのプレートの上に“*We have free room*”と貼り紙がされ、隠されていた。ここでの聞き取りは断られた。

(4) Gペンション

もう1つ、このタイプのペンションと思われる事例を紹介する。Gペンションである。これは複数の人物が共同経営しているものであり、その一人のA氏からヒヤリングを行った。Gペンションの名称はアゼルバイジャンの地名と一致する。そこから推測されるように、アゼルバイジャン人が常宿とするペンションである。A氏は、アゼルバイジャンのトルコ側の飛び地であるナヒチェバン出身の元アマチュアボクサーで、トルコ在住歴約1年になる。トルコ入国後にアンタリヤに直行し、約半年間、アンタリ

ヤ市内の別のところで働いたが、給料の遅配に怒って辞職し、1996年2月からGペンションの実質的切り盛りを任されている。オーナーはアンタリヤのマナヴガット在住のトルコ人で、気がむいた時にふらっとペンションによる程度である。

A氏によると、ペンションの開設年次は不明だが、ペンションの建物自体は少なくとも150年以上の旧家屋を改装したものだそうだ。中庭は隣の家屋の石積み壁とテラス付きのペンション部に囲まれ、静かで落ち着ける感じのペンションである。彼の給料は月に約1,200万リラである。A氏はほかに、個人的にロシア人ビジネスマンの通訳をして稼いでいる。このペンションで正式に雇用されているのは彼だけだが、長期の宿泊客が日々のペンション経営を手助けしてくれる。しかし、彼らには一切給料は払われていない。

宿泊客の国籍は、多い順から、アゼルバイジャン、トルコ、ロシア、旧ソ連中央アジア諸国となる。年間の延べ宿泊客数は約千人だが、そのうちアゼルバイジャン人が約半分をしめ、上記の国々からのお客を合計すると9割以上に達するとのことである。トルコ人も含めて、彼らはビジネス・商用でアンタリヤに来る長期滞在の宿泊客であり、観光目的に来る人は極めて少ない。たまた、日本人や欧米人の個人旅行者が宿泊することもある。

アゼルバイジャンから外国への出稼ぎ選好地は、以前はロシアであったが、現在では1にトルコ、2にロシア、あとは仕事があり、行ける所ならどこでも行くとのことである。トルコへの交通費はバスを利用すると、200万～300万リラですむ。トルコにおけるアゼルバイジャン人の仕事は、主としてロシア人金持ち相手の土産物屋での販売業務で、毛皮・皮製品店や宝飾店での勤務が多い。アゼルバイジャン人に支払われる月給は、同様の仕事をするトルコ人の約半分（500万～1,000万リラ程度）であるが、散発的な通訳業等の臨時収入もある。アゼルバイジャンは経済状態がよくなく、現金収入を獲得しうる職に付くのは困難である。トルコでは、ロシア語とトルコ語の会話ができるなら、職を見つけるのは容易である。アゼ

ルバイジャンでは5人家族で月に1,000万里ラもあれば充分なので、節約してトルコで半年ほど働けば結構な金になる。中央アジア諸国からの宿泊客も同様に、ロシア人相手の販売業や通訳として働いている。トルコ国内におけるアゼルバイジャン人の稼ぎは、基本的にロシア人観光客の存在に依存しているのである。アンタリヤ近郊に在住するアゼルバイジャン人は、A氏の推測によると、400~500人程度である。彼はアゼルバイジャン人の就職の斡旋もしているので顔が広く、彼が直接知るアゼルバイジャン人だけでも100人を超えているという。

さて、Gペンションの部屋数は、基本的には3人部屋が9室だが、夏場はテラスを開放して10部屋になる。ベッドは簡易ベッドも出すので、おおよそ40弱のベッド数になる。宿泊費は1ベッドあたり1泊30万里ラであり、これは破格の安さである。

以上のようなヒヤリングだけでは、Gペンションが、前述の類型に属するものかどうかは不明である。しかしながら、筆者らは聞き取り中に、Gペンションにいたスラブ系の女性が、タクシーでペンションに乗り付けた男性と何処かへ出かけるのを目撃した。また、シャワーあがりのスラブ系の女性がバスタオル姿でうろうろしていた。我々が、後日、Gペンションに挨拶しに行った際には、共同経営者のトルコ人が、中庭のベッドで女性と戯れていた。印象として、売春を行っているように思われる。このような雰囲気からすれば、少なくとも売春斡旋的な機能を、このペンションが果たしているものと推測される。カレイチに住むほかのトルコ人も、ほぼそうであろうと思っているとのことである。

(5) Dホテル

ホテルという看板を掲げているが、実質的にはペンションであるDホテルは、この類に属すると断言できる訳ではないが、ある種のいかわしきを持っている。現経営者はブルドゥル出身でコンヤアルトゥに住む30歳のD氏である。キリム屋夫妻によれば、このホテルの経営者と従業員

はすべてクルド人だとのことである。しかし、風貌からは判断不能であった。D氏がDホテルの経営に乗り出したのは、1992年である。敷地と家屋は1990年に、前の借家人を介して100万マルクで、ペンション付帯設備を含めて購入した。30年前にこの敷地はカレイチ在住の船乗りだった人物のもので、もともと、この元船乗りの親類がここでペンションを始めた。当時は、現在のホテルと同じ名前を持つペンションだった。D氏が、この物件を購入した後すぐに、中庭に新しい棟を増築し、壁を塗りかえた。レストランとバーコーナーも増設した。冬場の1月と2月は掃除・点検を兼ねて休業閉店している。

現在の部屋数は2人部屋が12、3人部屋が4、ダブルの部屋が3、合計19部屋の42ベッドである。2人部屋の宿泊料が150万リラで、一人で泊まるなら80万リラになる。全室にホットシャワーとトイレが付いている。D氏の奥さんはペンション経営を手伝わない。ここで働いているのはD氏以外に、レセプション業務に1人、客室清掃業務に1人、バー・レストラン業務に2人、夜番と遊軍に1人の計5人である。夜番はD氏の親類で給料は払っていない。その他の従業員は、全て近所に住む人である。レセプションに月370マルク、掃除人やギャルソンには一律に月200マルク程度を払っている。

客層としては、ドイツ・フランス・オランダからの個人旅行者が多く、国内のトルコ人旅行者は少ない。ロシア人旅行者は金持ちなので、このホテルよりも格上のホテルに宿泊する。ロシア人女性は売春をするから宿泊をさせない。客室は、夏になるとほぼ常にうまるが冬は少ない。今後もペンション経営は継続したいと思っている。

このようにD氏は語っていたが、どこまで真実か疑わしい。筆者らを観光ガイドブックの調査者とかんぐっていたようであった。キリム屋夫妻によれば、前述のMペンションに宿泊していたある日本人学生が、Mペンションに宿泊していたルーマニア人売春婦を買おうとしたところ、Mペンションの雇い人に室内での売春を禁じられた。そこで、Dホテルを紹

介したところ、1人の宿泊費でルーマニア人女性を引きずり込むことに、D氏は即同意したという。キリム屋夫妻が日本人観光客をDホテルに、宿泊料を確認して送り込んで、宿泊料がころころ変わったり、Dホテルの従業員が女性旅行者をデートに強引に誘うということもあった。

3. 小 括

以上のような諸事例を総合的に考察すると、不安定な経営を強いられるのは、一般的にみて、土地・建物の所有者とペンション経営者が別で、経営者が高い地代・レンタル料を支払わなければいけない、という場合である。地元の人が自分の土地でペンションを経営するか、土地ごとペンションを買い取るかしない限り、ペンション経営は苦しい。利益があがるとすれば、土地が自分のもので賃貸料を支払わなくてすむ場合であると思われる。その場合でも、必ずしもペンション経営が安定するというわけではなく、家族労働力でまかなうか、ペンションのための建物の一部を、より安定した収入の見込めるサービス企業などにも賃貸して初めて、経営が安定するものと考えられる。

不動産所有者は口八丁手八丁で高いレンタル料を提示し、契約に持ち込む。地元の人には経営が成り立たないと分かっているが、よそ者はアンタリヤやカレイチの観光状況を知らずに借りてしまうことが多い。そういう経営者たちは、夏のハイシーズンに十分な利益を得ることができず、冬のローシーズンの閑古鳥の状況に恐れをなし、再度売りに出し、次のシーズンは違う経営者に代わる。

ペンション経営者に対する賃貸料が決して安くないという事例を2つ挙げる。1つは、ケシクミナレ付近の14部屋の物件で、1996年6月現在で保証金が7万マルク、賃貸料が年に7千マルクだった。この物件は、カレイチで最も安い部類に属する。もう1件は部屋数が12～13部屋で、1996年6月現在で保証金が1万2千ドル、賃貸料が月に1,200ドルである。上記のキリム屋によると、このレンタル料では経営は成り立たないだろうと

のことである。実際、年間千人のお客を見込めるとすれば、7千マルクの賃貸料を払うには、お客1人あたり、7マルクの賃貸料を見込む必要がある。経営者自身の労働コストや光熱費、朝食代などを含めた諸経費を上乗せし、さらに利益をあげるためには、20～30マルク程度の1泊料金ではやっていけないと思われる。実際のカレイチでの宿泊料金は、この程度が相場であるにもかかわらずである。

また筆者らが、カレイチ内のある不動産物件を管理しているトルコ人から聞いたところによると、CペンションとHペンションが並ぶブロックの角向いの空き家は、土地・建物込みで35万マルクであった。一般にカレイチの不動産売買は、顧客と不動産屋の間に仲介人が介在する。仲介人は不動産所有者の知り合いであることが多く、売り出されている物件に住んでいることも多い。ちなみに、上記キリム屋の店のレンタル料は、道路沿いの部屋が年間5千ドル、奥にあるもう一部屋が月に1,200万リラ(140から150ドル)する。

しかし、ペンション経営は、オーナー経営の場合でも決して安泰ではない。1990年前後にペンションの数が急増するほどに、1980年代後半以降、多数の観光客がアンタリヤを訪れた。しかし、近年、来訪客数が減少しつつある、という認識を経営者たちは持っている。Bペンションもそうである。これは、1993年にコンヤ出身のオーナー（土地込み）が経営しているペンションであり、日本にも『地球の歩き方』の旧版で好意的に紹介されたために、日本人個人旅行者が多く宿泊し繁盛していた。しかし、1996年に出版された新版では、個人旅行者からの否定的投稿が掲載され、同年の夏は日本人個人旅行者が意図的に避けて通るようになった。そのため、現在の経営は苦しくなっている。

V. おわりに

トルコの国際ツーリズムの一大センターであるアンタリヤで、保養客向

けに設立されたペンションの経営は、1980年代には繁盛した。トルコへの、そしてアンタリヤへの国際ツーリズムと国内ツーリズムが隆盛したからであるし、その割には宿泊施設が不足していたからである。1980年代前半に開設されたペンションは、ヨーロッパ人観光客をあてこんで、個人的に投資できる範囲で設立されたものである。その思惑はあたったと言えよう。

しかし、現在では、初期の成功に刺激されて設立されたペンションの急増により、施設の供給過剰という状態にある。それゆえ、ペンション経営は一般的に厳しい状況にある。にもかかわらず、あるいはそうだからこそ、新築や修復中のペンションも少なくない。東欧・ソ連での社会主義体制の崩壊と、ユーゴスラビアでの内戦が激化してから、トルコへのヨーロッパからの観光客が、大企業オペレータの商品に大きくシフトしてきた。そのような中で、ペンションに泊まる客層も変化してきた。確かに、アンタリヤ市のペンションは、ドイツやフランスからの観光客をあてこんで設立されたものが少なくないし、実際、このような西欧からの観光客が宿泊している。しかし、1980年代初めから、西欧からの観光客だけでなく、アンカラやイスタンブルなどから来たトルコ人も宿泊したと言える。1990年代になると、そうした観光客に加えて、東欧・ロシア、さらには中央アジア諸国からの来訪客が、アンタリヤのペンションに宿泊する客として大きな比重を占めるようになってきている。

この東欧や旧ソ連領域から来てペンションに宿泊する人々の多くは、いわゆる観光客ではない。彼らは、より富裕なロシア人観光客を相手に、土産物屋で働いたり、通訳などを務めて稼ぐためにアンタリヤに来たのである。その際に、安価な簡易宿泊施設としてのペンションに起居しているのである。中には、売春のために来る人々もいる。その客は必ずしもより富裕な観光客というわけではない。しかし、観光客が内外から多数くる匿名社会だからこそ、アンタリヤで売春という現象が目につくようになっていとも考えられる。その意味では、売春のためのアンタリヤへの

外国人来訪も、国際ツーリズムが生み出したと言えよう。

ひとたび、このような質的劣化の道をペンションが歩み始めると、そのうわさが、氾濫する旅行ガイドブックなどに掲載されたり、口コミによる情報拡散を経て、ますます個人旅行者が敬遠する宿泊施設となる恐れが強い。また、個々のペンションの経営は苦しくとも、上のような需要がペンションに対して根強くあるとすれば、ペンションの群生が下水処理などからんだ環境保全の問題を引き起こしかねない。

しかし他方で、カレイチのペンションは、街並み保存政策のゆえに成功し、その保全に役買っているという側面を持っていることも事実である。また、家族経営を中心とした零細企業ではあるが、アンタリヤでの雇用の確保にも寄与している。さらに、観光産業に不可欠の労働力にとっての安価な宿泊所という意味もある。旅行が個人的な楽しみであれば、個性を追求する旅行者は決してなくなるらない。そうした個人ツーリストに対して、相対的に安価でくつろげる、またエキゾチシズムを満足させる宿泊機会を提供するという、ペンションの積極的な役割は依然として重要である。個人ツーリストが、今後増えるかどうか、これは国際ツーリズムをめぐる大手ツアーオペレータの宣伝力と、ツーリスト自身の好みの変化に依存しているので、必ずしも楽観できない。しかし、旅行が大手ツアーオペレータに組織されればされるほど、それは画一的なものになりやすい。大手ツアーオペレータは、より豪華な旅行を、より安い価格で提供しようとするからである。こう考えれば、ペンションの経営が完全に行き詰まると断ずることができるわけではない。

カレイチにあるペンションの中で、ある種のいかがわしさを持っているものが少なくないということは事実である。しかし、アンタリヤを訪れてみればすぐ分かることだが、全体としては健全なリゾートである。その中で、旧市街であるカレイチは、その迷路のごとき街路と、オスマン様式の建物、立ち並ぶ土産物屋、レストラン、ペンション群、そして、トルコ人と外国人とであふれかえる狭い街路、というようにまさしく西欧人の目か

らみて「オリエント的」雰囲気はただよう、しかし同時にヨーロッパ的要素も帯びた界限なのである。このような所にある種のいかがわしさが存在するのは避けられないことであり、それがアンタリヤ市へのツーリズムの魅力にもなっている。しかし、そのいかがわしさが、雪ダルマ式に膨らんでいくのであれば、貴重な観光資源が劣化してしまう。

現在のところ、西欧のガイドブックは、カレイチのペンションを好意的に扱っている。ペンションが良質の水準を維持し、カレイチが内外のツーリストにとって今後とも魅力を与えつづけることができるかどうか、この問題はペンションの存在形態に大きく依存する。ペンションの供給が既に過剰となっており、それゆえ淘汰されて減少していく、という予想が関係者からのヒヤリングからうかがわれる。しかし、他方において、今もなお新設されるペンションがあることを、われわれは現地でも観察した。そして、現に過去数年、増加し続けてきた。今後もさらに一層増えるかどうか、この問題は、大きくみればトルコにおけるツーリズムの今後の動向にかかっているとさえ言う。その動向は、冒頭に掲げたツーリズムの7つの要素のうち、ツーリスト、ツアーオペレータ、政府・地方自治体が、どのように行動するか、これらの間の相互作用によって左右される。

言うまでもなく、マストーリズムを担うツアーオペレータは、その商品の中にペンションを組み込む可能性は低い。そのような商品に対して、ツーリストは、自己が求める多様な選択としてのツーリズムを実現しようとするれば、ツアーオペレータの影響をあまりうけないペンションという宿泊施設に頼らざるを得ない。個性的な行動をとろうとするツーリストの要求に応えうようなサービスを提供できるほどに、ペンション側が実力を持てるかどうか問題となる。政府・地方自治体は、宿泊施設に対する規制の強化・緩和を通じて、ペンション経営に影響力を行使できる。のみならず、潜在的ツーリストに対してペンション群の魅力を宣伝しうる力も持っている。経営規模の小さい個々のペンションだけでは、とうていそのような力を発揮できない。もちろん、ペンション群が例えば組合を結成し、これに

よってマーケティングを行う道も論理的にはありうる。しかし、浮沈と経営者の入れ替わりが激しいアンタリヤのペンション業界では、組合化の道は事実上厳しい。それを誘導しうる主体があるとすれば、政府・自治体であろう。この意味からも、政府・自治体の役割は小さくないと言える。

付記：本稿は、平成7、8年度に、文部省科学研究費補助金を得て行われた国際学術研究「トルコをめぐる国際ツーリズムと都市発展の相互作用に関する社会地理学的研究」（研究代表者：東京都立大学都市研究所教授中林一樹、課題番号：No.07041063）の研究成果の一部である。ヒヤリングに応じてくれたトルコの人々に感謝する。また、文献収集の一部については、研究チームの一員、東京都立大学の若林芳樹氏にお世話になった。そのほか、この研究プロジェクトに参加した方々にも、現地での聞き取りの解釈などをめぐる議論をしていただいた。記して感謝する。

《注》

- (1) ここで言うツーリズムとは、ビジネスツーリズムを除く、余暇を活用する旅行のことを考えている。
- (2) トルコが国際ツーリズムにおいて急速に成長した国であること、そこではトルコ政府の積極的なツーリズム開発政策が重要な役割を果たしたということについては、Yamamoto (1997)を参照されたい。
- (3) アンタリヤ市の成長・都市開発と国際ツーリズムとの関連については、水内俊雄(1996)を参照されたい。
- (4) 言うまでもなく、トルコ国内のアンカラやイスタンブルなどから、多数のトルコ人もアンタリヤに保養に来る。こうした国内ツーリズムも含めて、夏のアンタリヤ市の実質的な居住人口は、1990年代半ばすぎには百万人近くに達するようになったと言われている(水内, 1996, p.36)。
- (5) 検討したガイドブックは、英語のものが *Turkey. The Rough Guide* の1994年版、*Turkey - a travel survival kit* の1993年版、*Blue Guide Turkey* の1995年版、*Fodor's Exploring Turkey* の1997年版、ドイツ語のものが *Baedeker Türkei* の1993年版、フランス語のものが *Guide Blues Turquie*

の1996年版、*Le guide du Routard Turquie*の1997年版、*Guide Editions Atlas Turquie*の1996年版である。

- (6) トルコ人の夏の保養の仕方は、伝統的には、高地で過ごすものだった。高地ではヤイラという簡易な小屋をしつらえ、そこで酷暑を避けた。しかし、1960年代末ころから、夏の保養のために海岸で過ごすという行動が、次第に普及した。海岸でも、ヤイラに類似する簡易な小屋を作り、そこで家族が過ごしながら、働き手は職場に通うという形態が普及するようになった。海岸に作られた夏の保養のための小屋をオバと呼ぶのである。詳しくは、Höhfeld (1995, S.185-187; 1986, S.74-93), Hütteroth (1982, S.441-444)を参照されたい。
- (7) A ペンションでの聞き取りは、1995年8月に磯部啓三(成蹊大学)、水内俊雄(大阪市立大学)、山本健児の3人で行った。その概要を山本が取りまとめ、1996年8月、F氏とF夫人に読んでもらって確認した。この年には、A ペンションに滞在中、随時、山本がF氏から聞き取りをし、1995年の聞き取りを補足した。
- (8) カイセリに投資した人々は事業の才能を持っており、各種の工業部門で成功した。この人々は現在でもドイツに住んでいるとのことである。こうした企業は順調に成長し、メットマン以外やドイツ以外のところに住んでいるトルコ人からの出資も増やしていった。以上のようにF氏は語ったが、そのことは未確認である。なお、在外トルコ人が出資してトルコに企業を設立する動きの嚆矢は、1965年12月にドイツのケルンで設立されたテュルクサン(Türksan)という企業だった。これ以降、1970年代末までの、こうしたいわゆる「トルコ人労働者企業」については、Şen (1983)が詳しい。
- (9) ちなみに、F氏によれば、当時のアンタリヤにあった外国人ツーリスト向けのホテルは、Yeni Hotel, Yalm Motel, Talia Hotel, Star Hotel, Büyük Hotelしかなかった。また、外国人ツーリストも泊まることのできる水準のペンションは、Emek Pansiyon, Bayram Oğln Pansiyon, Altan Pansiyon, Turel Pansiyon(ララに立地)、それに名称不明のものを加えて5軒しかなかった。F氏のペンションは6番目の外国人ツーリスト向けペンションとして設立されたのである。これらのうち、Rauh (1979, S.34-36)が記述している1970年代末のアンタリヤ市内の主なホテルのうち、一致する名称はビュユックホテル(グランドホテルという意味)だけである。Rauh (1979, S.34)によれば、これは1960年前後に設立された、観光省のライセンスを取得したホテルとして、アンタリヤで最も古いものだった。このホテルの所有者は、Rauhの調査の時点ではある宗教教団になっており、イスラーム復興をめざ

す教団の政策の故に、このホテルの経営者は酒類の販売を禁止されていた。そのために、外国人観光客もトルコ人観光客も、ホテルの経営者に抗議することが多かったとのことである。また、建設以来、修繕を怠っていたので、設備も老朽化し、必ずしも快適なホテルではなかったと記されている。それにもかかわらず、1977年の1月から9月までの期間中、74のベッドを持つこのホテルは、平均して90%の回転率であり、そのうち外国人が約22%を占めた。夏になると外国人の比率は35%に上昇した(Rauh, 1979, S.36)。F氏によれば、アンタリヤ市中心部にほど近い海岸よりの見晴らしの良いところに、ビュユックホテルという中級ホテルがあった。これは1985年頃まで存在していた。このあたりには病院もあった。しかし、国際ツーリズムのための市街地再開発の過程で、これらは取り壊された。現在、ここはアタテュルク像が立つ公園となっている。

- (10) ただし、さまざまなツーリズム産業関係者からのヒヤリングによれば、近年、ヨーロッパからの大衆観光客は3スター級のホテルを組み合わせたパッケージを購入する傾向が強まっているとのことである。そのため、高級ホテルの経営は決して安泰というわけではない。また、筆者らの観察によれば、コンヤアルトゥ海岸沿いに新築されたアパートホテルは専用プールを備えており、3スター以下の等級のホテルよりも安く泊まれるが、相当な繁盛ぶりであった。
- (11) この聞き取りは、松村が行った。
- (12) 5軒のペンションがカレイチのなかにあったのか、それともアンタリヤ市内ということなのか、残念ながら未確認である。1981年は、第3章で詳述したF氏のペンションも開業した年である。1978年ころにはまだカレイチ内部には1軒も宿泊施設がなかったとRauh (1979)は記録しているので、S氏が語る「カレイチ内に5軒」というのは、アンタリヤ市内と理解したほうがよいだろう。

文 献

- 水内俊雄 (1996) : 国際ツーリズム下におけるトルコ・アンタリヤ市の都市発展と都市政策, 『人文研究』(大阪市立大学文学部紀要), 第48巻, 第3分冊, pp. 35-65.
- Antalya İl Turizm Müdürlüğü'nce Hazırlanmıştır(1996): *1996 Antalya Turizm Envanteri*, Grup Tanim & Danışmanlık, Antalya.
- Baedeker Türkei*, Verlag Karl Baedeker, Stuttgart, 1993.
- Blue Guide Turkey*, A & C Black, London, 1995.

- Fodor's Exploring Turkey*, Fodor's Travel Publications Inc., New York, 1997.
- Guide Editions Atlas Turquie*, Editions Atlas, Paris, 1996.
- Höhfeld, Volker (1986): *Persistenz und Wandel der traditionellen Formen des Fremdenverkehrs in der Türkei*, ergänzt und aktualisiert nach Unterlagen von Yaman Doğan, (Beiheft zum Tübinger Atlas des vorderen Orients), Dr. Ludwig Reichert Verlag, Wiesbaden.
- Höhfeld, Volker (1995): *Türkei. Schwellenland der Gegensätze*, Justus Perthes Verlag, Gotha.
- Hütteroth, Wolf-Dieter (1982): *Türkei* (Wissenschaftliche Länderkunden Bd. 21), Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt.
- Le guide du Routard Turquie 1997/98*, Hachette, Paris, 1997.
- Rauh, Günter (1979): *Beobachtungen zum innertürkischen Fremdenverkehr in der Provinz Antalya* (mit einem Beitrag von Wigand Ritter "Morgenländische Traditionen im Tourismus", Nürnberger Wirtschafts- und Sozialgeographische Arbeiten, Bd. 30.
- Şen, Faruk (1983): *Türkische Arbeitergesellschaften*, erweiterte 2. Auflage, Peter lang, Frankfurt am Main und Bern.
- Statistisches Bundesamt (1989): *Länderbericht Türkei 1989*, Stuttgart.
- Statistisches Bundesamt (1994): *Länderbericht Türkei 1994*, Stuttgart.
- T. C. Başbakanlık Devlet İstatistik Enstitüsü (1991): *1990 Genel Nüfus Sayımı İdari Bölünüş*.
- Turkey - a travel survival kit*, Lonely Planet Publications, Hawthorn, 1993.
- Turkey. The Rough Guide*, The Rough Guides Ltd., London, 1994.
- Turquie Guides Blues*, Hachette, Paris, 1997.
- Yamamoto, Kenji (1997): Development of international tourism in Turkey - its effect and problems-, in: *Journal of International Economic Studies*, No.11, pp. 69-92.



写真1 アンタリヤ旧港(ヨットハーバー)ごしに見たカレイチ(旧市街)
手前に城壁が見える。中央の新しい集合住宅を除くと、低平な建物群で構成されている。
1995年8月寺阪撮影。

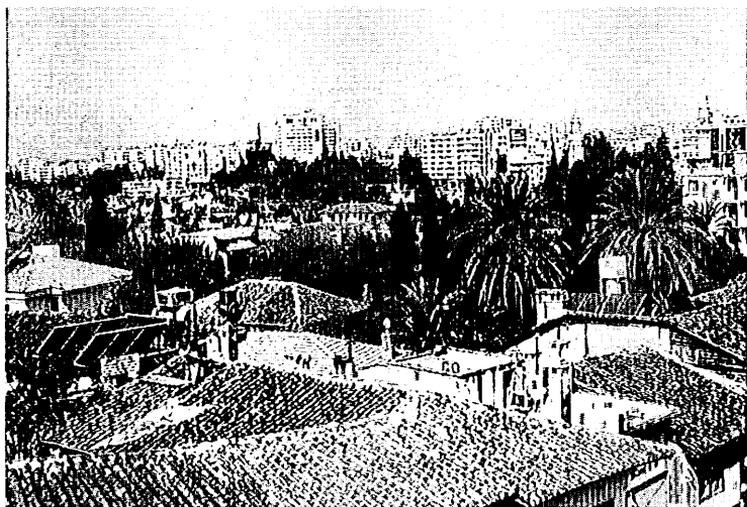


写真2 ハドリアヌス門の上から見たカレイチと新市街
手前の低い建物群(瓦屋根)と新市街(城外)のコンクリート建て中層住宅とのコ
ントラストに注意。右手樹木の中にイヴリミナレが見える。1996年8月寺阪撮影。

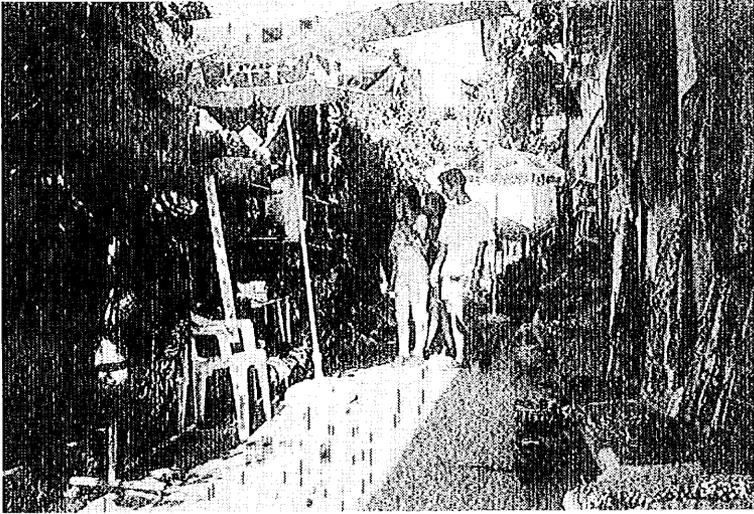


写真3 カレイチの土産物店と外国人客
狭い路上に店を広げている土産物店。日中で人通りが少ない。1995年8月寺阪撮影。

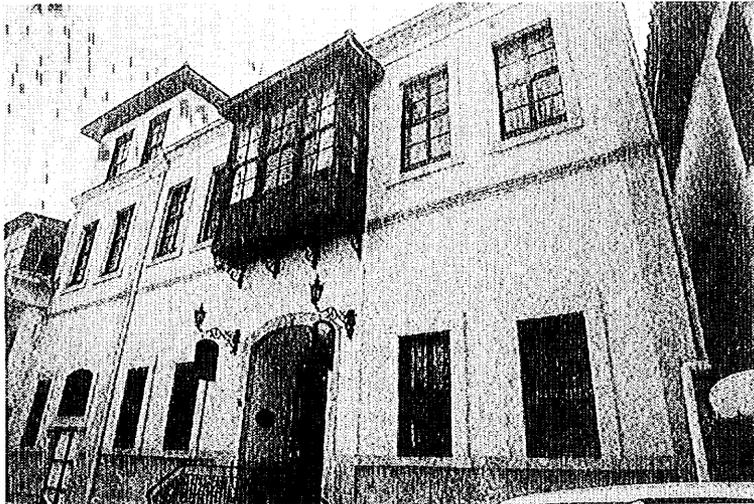


写真4 カレイチのホテル。
この地域で最も古くから営業していて、ほとんどのガイドブックに取り上げられている。19世紀後半の伝統的の石造りで、特別ライセンスホテルに指定されている。1996年8月寺阪撮影。

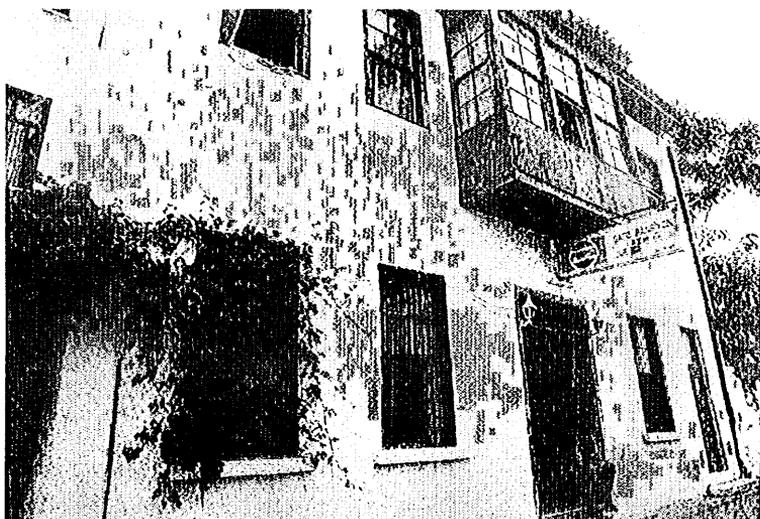


写真5 カレイチのペンション

古いオスマン様式の住宅をほとんど改装せずに使用している。1996年8月寺阪撮影。



写真6 カレイチのペンションオスマン様式の建物

外側を少し修理している。同じ様式の建物が連続している。右端の塔はケンクミナレ。1996年8月寺阪撮影。



写真7 カレイチのペンション
新しい様式の住宅をペンションにしているもの。トルコ人
家族客がタクシーで到着したところ。1996年8月寺阪撮影。



写真8 工事中のペンション
石造りの土台の2階をのせている。仕上りを漆喰で塗る。屋根は赤瓦。
1996年8月寺阪撮影。



写真9 新市街中心部からカレイチに入った地点
正面は時計塔とバシヤモスクのミナレ。1995年8月山本撮影。

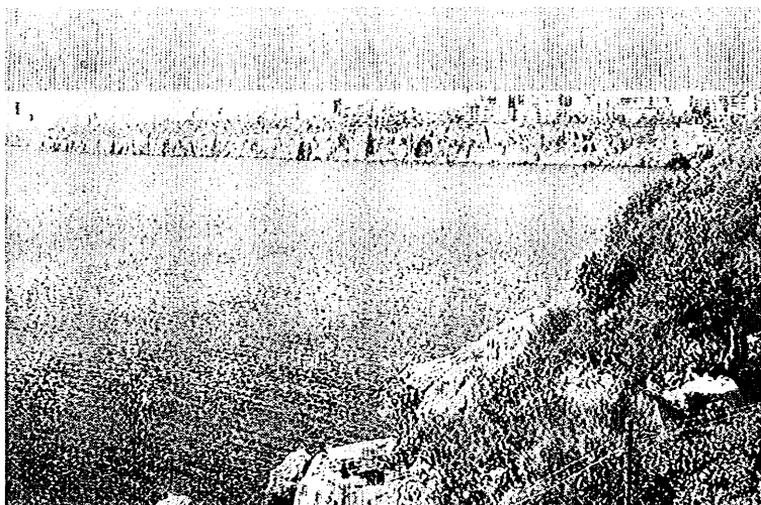


写真10 ゲンチリク・マハレから海ごしに見た断崖上の新市街
一番左手にある2つの建物が市内最高級5スターのホテル。手前の断崖下にはアダ
ラル・ビーチが見える。1995年8月山本撮影。

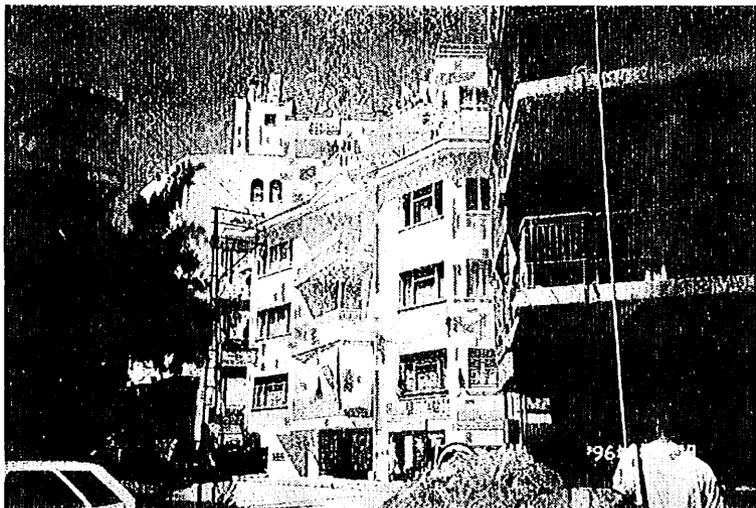


写真 11 新市街の一画にあるペンション

入り口の案内表示からロシア人ないしロシア語が堪能な人間を顧客としていると推定される。1996年8月山本撮影。

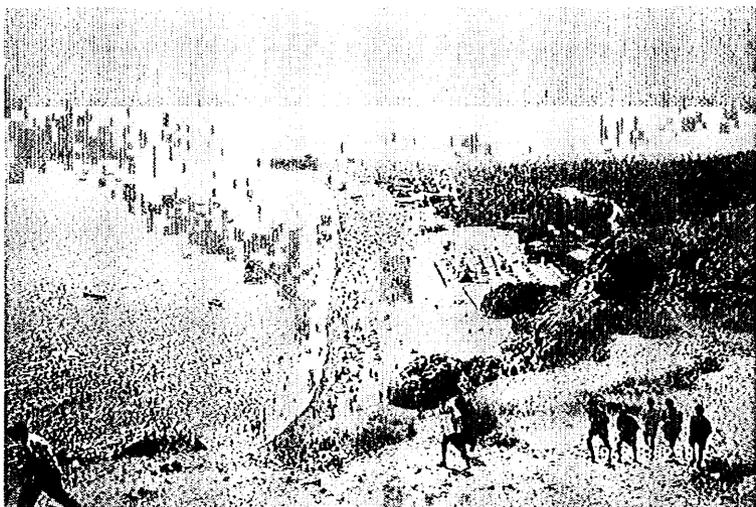


写真 12 砂利浜のコンヤアルトゥ海水浴場

背後の山はベイ山脈。海岸中央右手は、最高級ホテル専用区画となっており、ホテル宿泊客が利用する。波打ち際にいる人の多くはトルコ人である。1996年8月山本撮影。